再撰

花洛名勝圖會

東山之部

五

イ13
528
5

門 イ 13
別 528
巻 5

東山名勝圖會卷之三

目録

四條以南

宮川町　本社　鳥居　繪馬舍　手洗盤　東山建仁禪寺
　　御供所　赤社　神輿庫
　　佛殿　奥禪　護国院　菩提樹　安国寺恵瓊首塚　中門　樓門　阿弥陀堂　方丈　庫裏
　　妙徳石　浴室　法水池　大明神社　居庵摩利支天堂
　　西来院三墓　執斎墓　織田有楽斎塔　澤村自三墓　大竜院跡　赤松四心塔　松原徒士
　　友梅和尚塔　弁慶物見松　仁寺十境
古立條橋跡　十禪師社　晴明社　前掃部
城東寺　東五條院舊跡　壽延寺　愛宕念佛寺　本堂　祇園社
　　千觀車寄松　矢根門　二王門　天狗酒盛　本堂　南山堂　鏡池　法寺　松尾明神　西福寺
　　六波羅北方茅跡　六波羅密寺
　　阿古屋塚　十楠院　祥寿院　敬雲屋　閻魔堂　六道珍皇寺
　　石地藏　地府通路　翌檜堂
　　南无地藏无縁墓　主典辻子
興善野　阿佛家　安井觀勝寺　金毘羅社　繪馬舍　佛殿　遍華光院殿
　　唐門　清泉　阿弥陀堂　佛種尼塔　御影堂　新更科　萬壽山蓮乘院　本堂　崇德院墓
　　法守社　毘沙門堂　藤棚　惣門　南門　宮之辻　妙法院舊地并蛙ヶ池跡
鬼子母神　崇德馬場

天正十二年二月
花房職秀寄贈

菊水井　噲々堂　牛王地社　真葛原　圓山安養寺　本堂　弁才天社

吉水井　慈法和尚塔　僧生寺道塔　東山長樂寺　本堂　弁才天社　於素盞嗚尊社　四御殿　山王社　浮橋　方丈

織布石　知恩天皇　惠惠坊中書院

安徳天皇御衣懸寺　長樂寺碑文

東山大谷御廟所　本堂　聖人御廟上布石　殿舎　大廚所　浮橋

敷樓　茶所　唐門　東漸寺　本堂　自雷霆神社　方丈　法堂　泰山府君祠

松林　和詩道

菊溪　金玉山双林寺　本堂　社　法寺　本位寺

長吉庵　文阿弥　用阿弥　阿弥陀坊古趾　芭蕉堂　大雅堂　西行庵　今墓存銘文　西行上人像　祇園女御古蹟

皇太后妍子陵　就鳥尾　雲居寺旧趾　岩栖院古趾

金山寺古趾　就鳥峯山高堂寺　仏殿　唐門　方丈　宮殿　小方丈　菊澤水

時雨塚　文丙之塔　長浦子塔　天満宮　稲荷社

独秀軒　弦楼　傘亭　半化房開東墓　秀吉公墓　政丙の墓舎

七観音院　桂橋寺旧趾　青龍寺伽羅観音　八坂墓

霊應山法観寺　五重塔　太子堂　本堂　人麻呂社　八坂庚申堂　引導寺古趾

霊鷲山正法寺　釈迦如来堂　念仏堂　阿弥陀堂　毘沙門堂　祇園宮

翠紅館　八景

梅林　新橋渡

西光寺　本尊聖観音　空也上人廟　一心庵　蓮祠竹筒　毘陀羅

中村氏別墅鳴鳳亭　三年坂　経書堂　姫堂　一行塚　大日堂

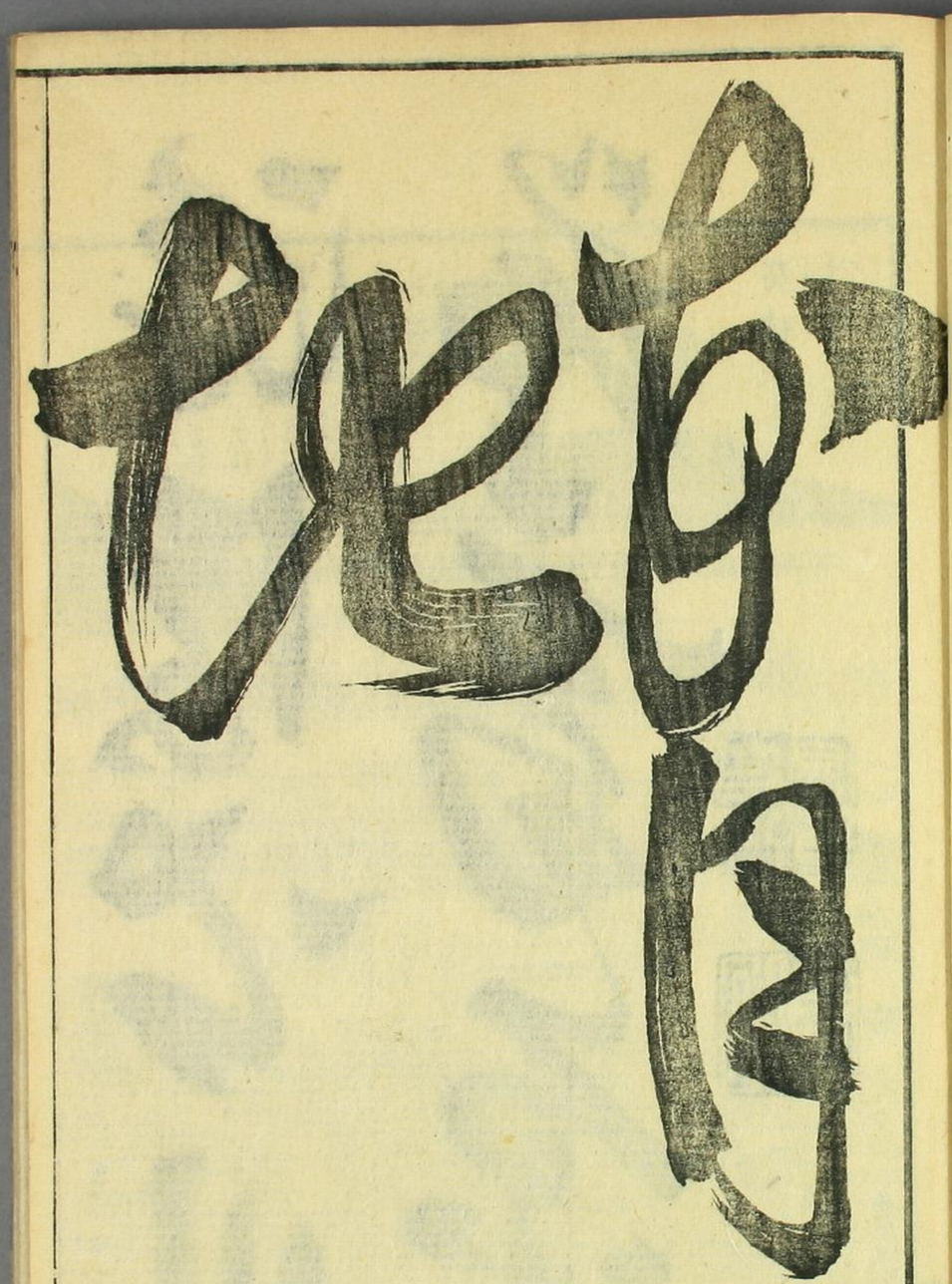
仲光院　寶德寺　地蔵院　泰産寺子安塔

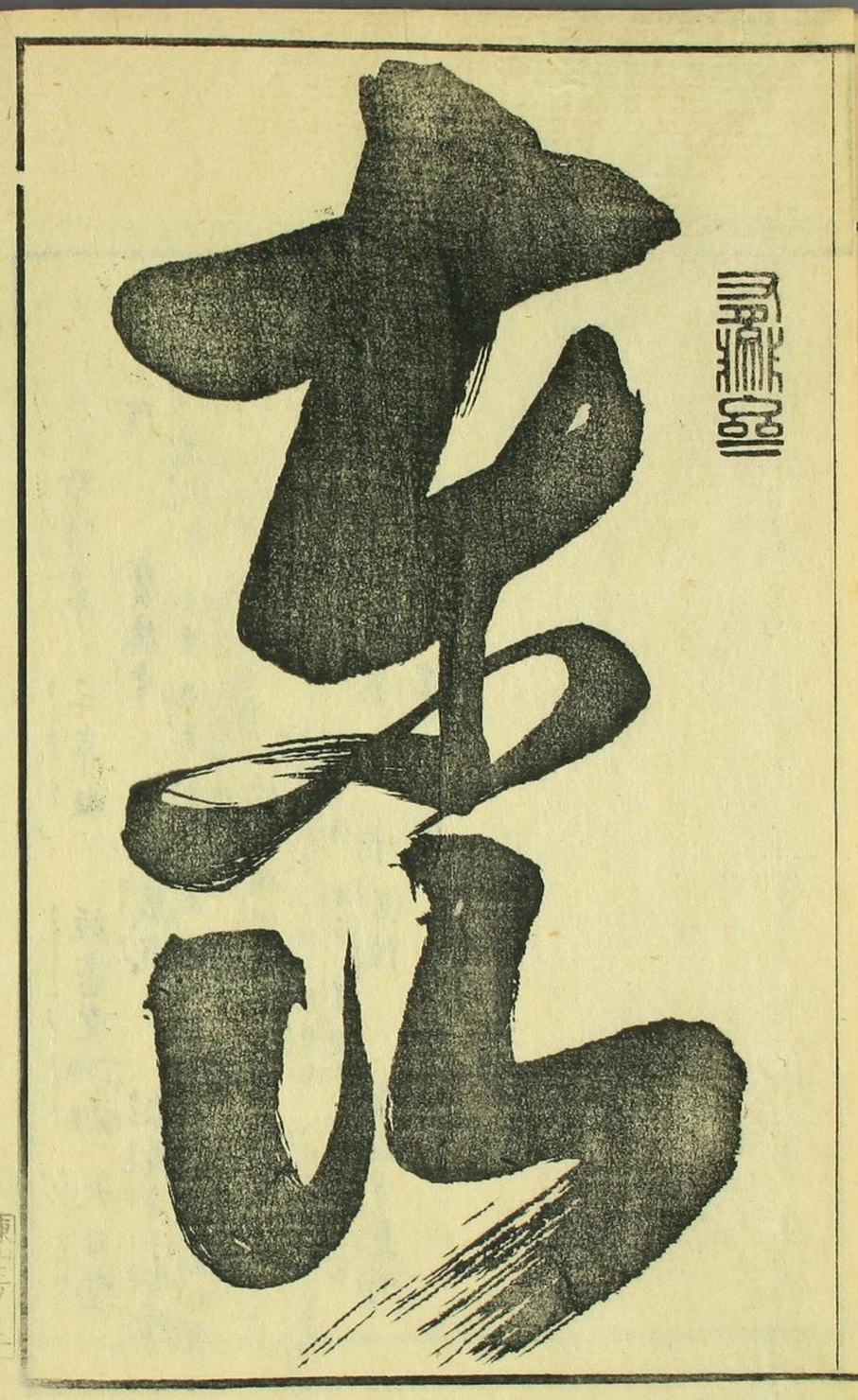
音羽山清水寺　本堂　舞基　中門　西門　東楼　楼門　経堂　三重宝塔　阿弥陀堂　釈迦堂　春日社　廊間塚　景清兜形　観音　随求堂　朝倉堂　奥千手堂　田村堂

歌中山　清閑寺　本堂　小督局塔　地主権現社　法寺山王社　要石　秋葉社　音羽瀧　浮流南蔵院

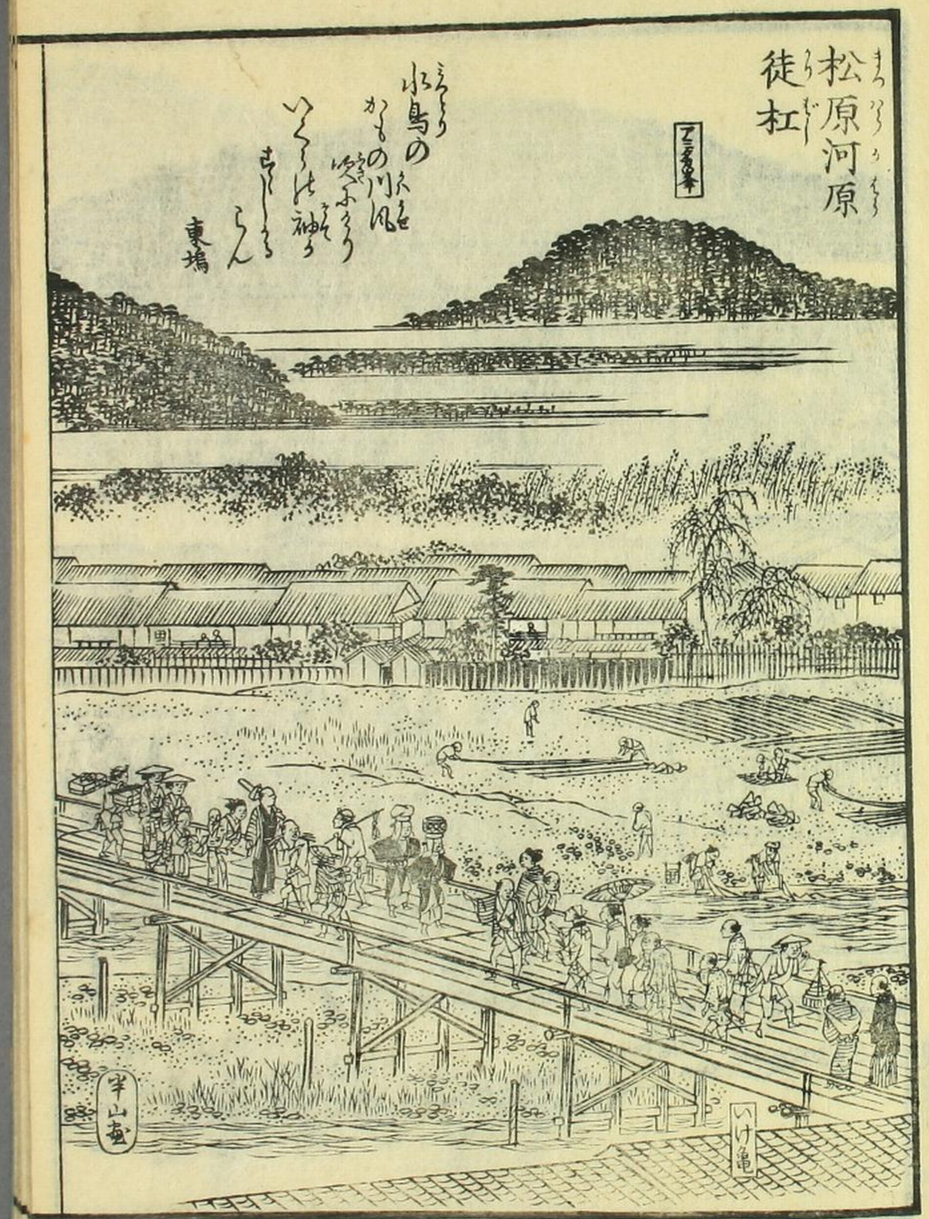
苦集滅道　拝志墓　中尾陵　覚明水　六條院陵　高倉院陵　並河天民之墓

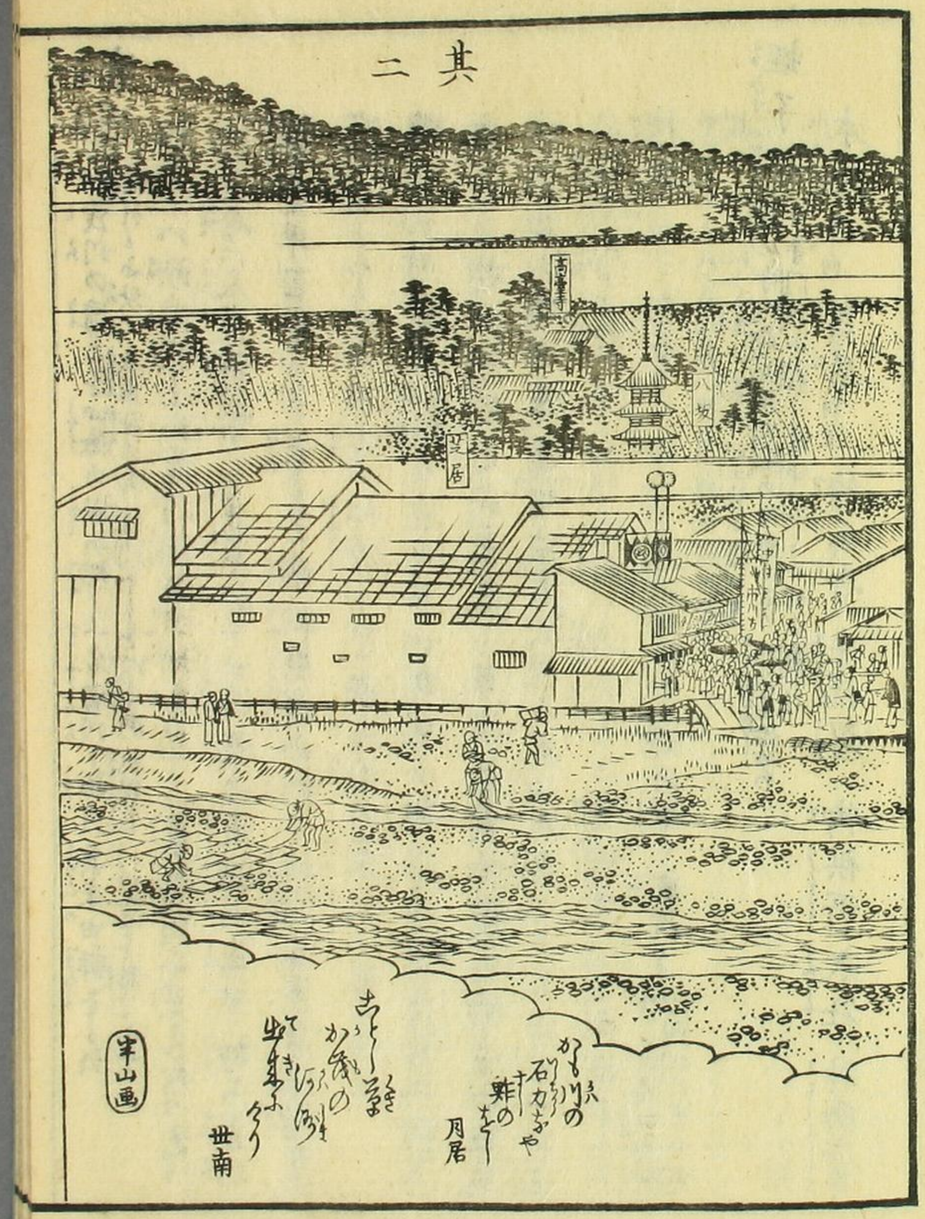
玉章地蔵堂　小町寺　瀋谷茶店　本國寺墓所

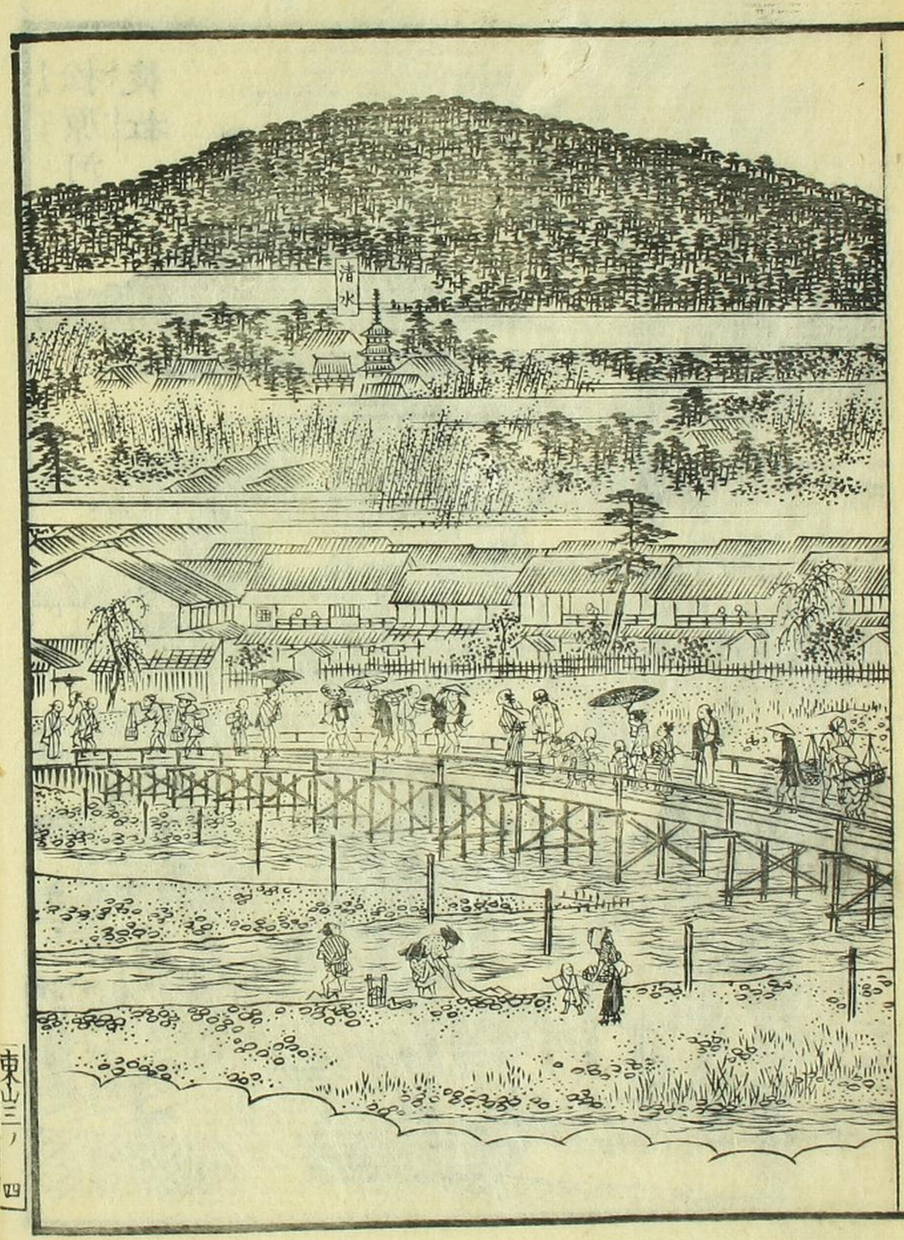




隅田川
夕涼




其二
高雲寺
八坂
芝居
半山画
月居
世南


清水
東山三十四

宮川 加茂川の流れを四條の南に到る一名宮川と称す其来由詳ならず按ずるに祇園社の南祇川を以て則祇園宮川の意を称するか

むかしは此邊凡て加茂川添の田地なりしを事古図に見えたりまた今は人家軒繁く建並びて四條橋の東詰の南甲即ち宮川筋壹甲目より夫より南松原通に到る此間五甲目迄續く

六町目より八甲目迄は松原より南五條の東北にあり

鴨東四時雜咏 西餅居士 自註云茅四橋南小街浴岸者爲宮川街又有許多樓肆煙華之品差属下等演劇優伶鬻色嬖童亦雜居其間與六街樓專屬娼妓者大同小異云云然るに天保年中河東の遊所町を禁せらるるの後は即許多の青樓華つらなる肉樓あるは精進店やなりつらなる殆んを尋常の市廛の如くなれり 但近頃祇園新地内外六甲の遊所を免されて宮川筋一甲目八新地外六甲に隷せらる

蛭子社 建仁寺門前大和大路の西側にあり此社其始めは日寺門内に在りしを中古この地に遷す

本社 東向 鳥居 日上 繪馬舍 手洗盤 御供所 末社 神輿庫等

皆社傍に列立して祭る所蛭子命の像は建仁寺開山栄西禪師曾祖父薩州刺史貞政の作る所にして禪師入宋の時これを随身して信敬すること斯く歸朝の船中激浪慕風甚しきに逢ひ此像を祈願して神速に其風波の難を逃れ直ちに順風を得たるの謝德のため建仁寺建營の時一社を立て其所に勸進したるに夫蛭子神は大國主命の御子事代主命なりと其海邊に釣して所の像を設るものは日本書紀に所謂事代主命遊行して出雲國三穂の碕に在て釣を垂て以て樂みとなす者の傳に依るなり蓋夷大黒の二神は本朝最初の地主神なり故に歳のはじめに掲げて祭る

本朝通紀曰推古天皇九年三月聖德太子始設市教商賣此時誓蛭子神爲商賣鎮護之神云云

當社は建仁寺境内甲々の産砂神なり例年九月十六日古へ世神輿を出して祭禮の式魏々たり夜は早くより大いなる神燈を出し

とれと氏子中の壮子勇を進む〻舁歩行々る又一観なり一頃い宮川早め
妓婦輩風流婆物あり
今八其事絶たり
の差若此社ふ群参たり〻〻福徳を祈る家裏ふい造る物の金銭
朴其外賓烏帽子の類を笹の枝ふ結付たる様ひ競ひ求め〻〻
とと肩ゆ〻ある〻瓦なる頭ふ薬鑵箔ふ〻なる烏帽子を著
なり〻謡ひつれ〻酔帰にまと十月廿日の夷講ゆも詣人群をを〻
つれや取るけ十日姪子い初春の一紋日ゆ〻〻河東の賑ひふるきか
とたく遊客騒士の遊泰初めるもいふ反きか

恵比須

数くの変をつけ〻行をふふをかけてを紀　雪臣

東山建仁禅寺　大和大路の南ふある門前通を建仁寺町〻ふ惣門三ヶ所共ふ西向あり　寺領八百二十一石塔頭二十五院
佛殿　南向　本尊　釋迦牟尼佛　坐像二尺許　脇士　迦葉　阿難　各立像
檀の左右ふ厨子あり　左ハ禅家の守護神太元右ハ嵯峨清涼寺摸形の釈尊を安い　興禅護國院　佛殿の辰巳丘の

上あり是開山宗西国師の落髪ふ影堂ふ　禅師の像を安い例歳七月五日開山忌を執行い
樂大明神社　開山堂殿下の鎮林中ふあり社鳥居ハ西向備中国吉備津宮第三神樂御前を祀る曾〻禅師の母此神を祈る師を誕生い
仍〻當寺ふ勧請　菩提樹　堂前南北ふあり宋国より将来い
ゆ〻〻ふ

続古今
ふるさとの梅もゆはひ日年のはその紅葉数やもの　栄西
年ふ残るとや思ひ
ふ浮を待ゆ〻時秋風身ふ〻るゆ〻

鐘楼　佛殿の東ふ二ヶ所あり西の方鐘銘ふ云
東山建仁禅寺鐘銘　千鈞大器冶而成　朝扣暮撞祝帝城
月白風輕響答響　天晴霜下聲傳聲
嘉暦乙巳三月三日　大工沙弥西念　施主比丘浄意
建仁禅寺住持比丘鐵菴道生銘
嘉暦乙巳浄意都管施財命工鋳殿鐘一口本源禅師作銘其
鐘損壊故募廣衆重鋳之彫鏤舊銘以為僧堂前鐘
永享辛亥十一月九日　大工平氏清續　幹縁比丘宝了
建仁禅寺住持比丘用章如憲誌

河原院鐘　東の鐘楼ふ拘る所の大鐘なり無銘中〻獨鈷の形を彫る傳へ云
往昔融大臣六條河原亭の別業を轉〻郎佛閣ゆ〻〻河原院ゆ

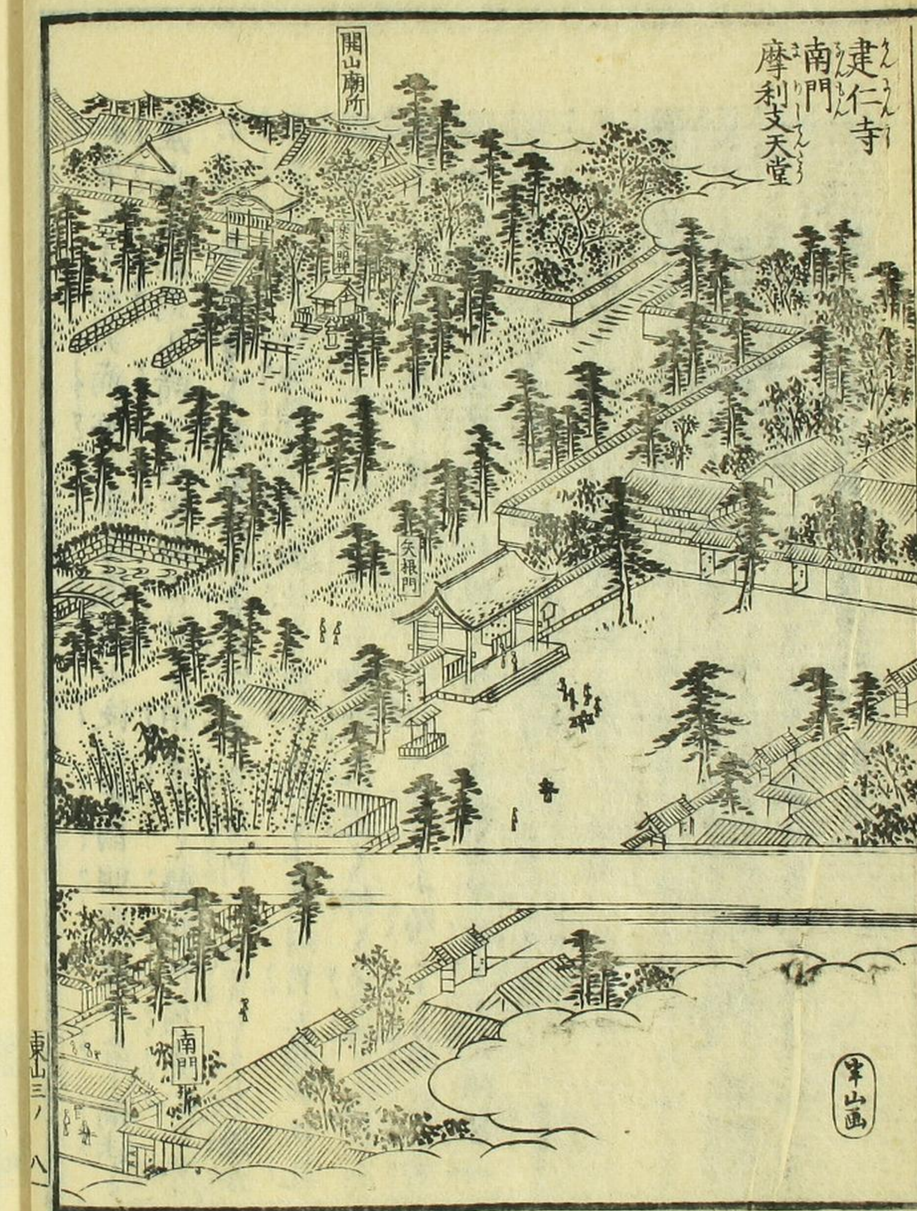
号に其院に掛る所の鐘なり然るを星移り物換りて仏閣破壊せる後加茂川に
捌ふ流れたるを宗西禅師窺ひ知り官府に求めて渉り引上げ当寺に移せり大鐘動
其響遠く聞こえたるを宗西禅師教へて曰く吾名及び寿長前
座の名を呼べ下知に力者即同音に長首坐と唱へ引揚げ今も尚世間に重き物を持運ぶに此鐘と云ひ此時の由縁なりとぞ
此鐘毎夜子の刻より数九十度撞く晨朝十八声を撞く合せて一百八撞なり
往昔は陀羅尼経の文を誦して撞く故に此鐘の色を建仁寺の
陀羅尼と称し俗まで夕ラリと呼ぶ此に名高き梵鐘なり

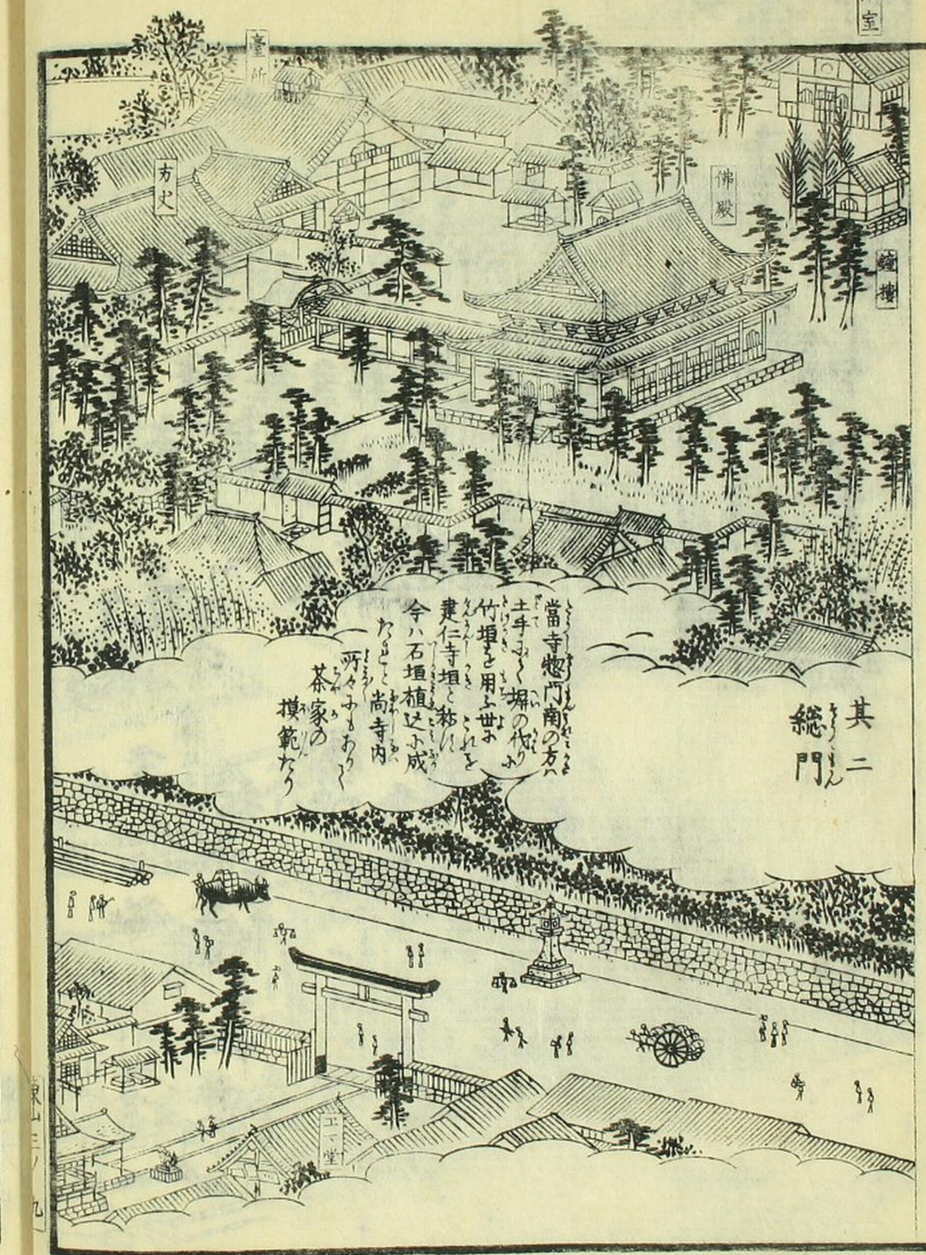
招提合在白雲隈何向花街柳陌開　藤原光真
九乳似鄰人醉夢蚤驚一百八声来

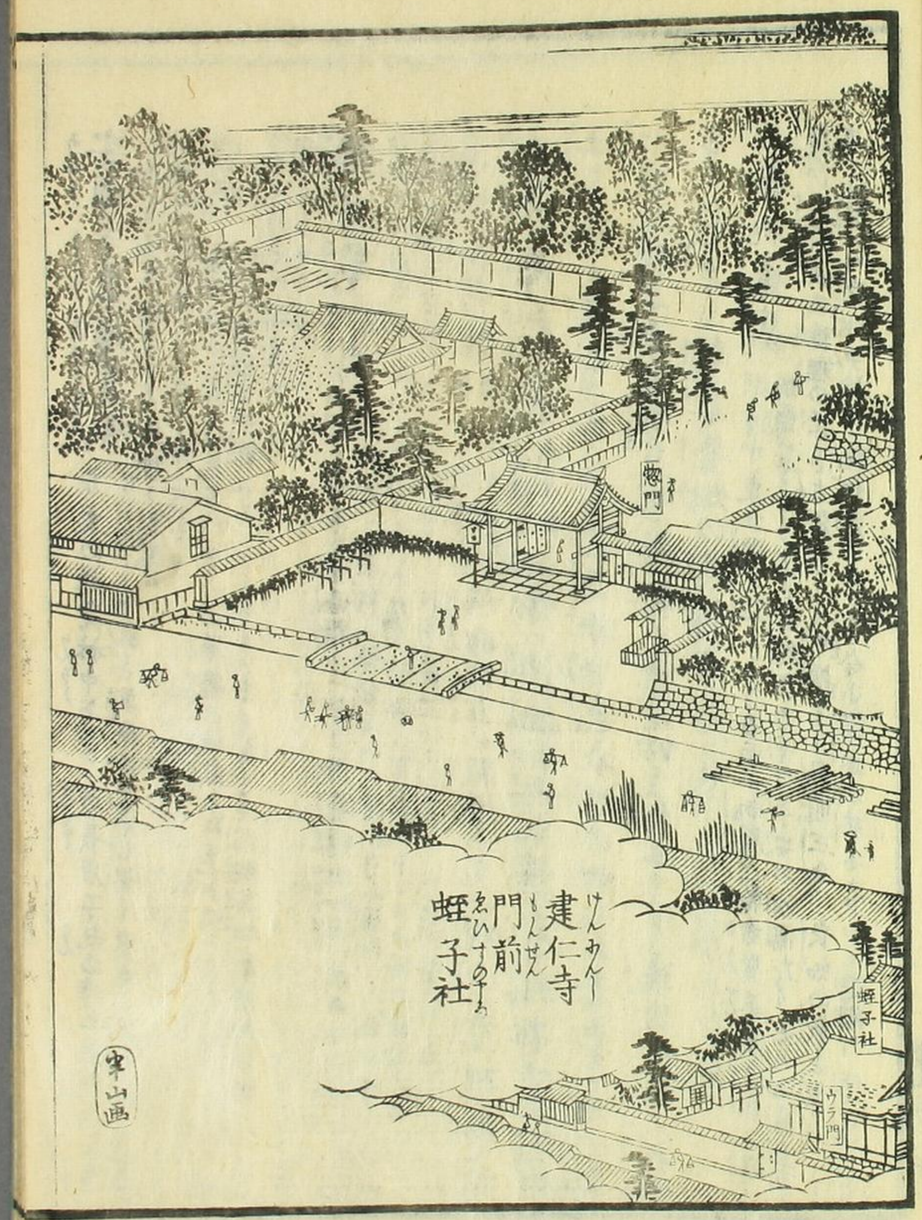
方丈 仏殿の北廊下続きに唐門及び玄関あり
経蔵 方丈の庭に向ひ一切経あり世に珍重せり俱に古代の宋板なり更に惜しむべき
妙徳石 門所北東溝の隅にあり此石声を出し人を呼ぶ妖あり虎鯱和尚焼香
持念の徳に仍て止む故に妙徳石と号し浴室の北の石橋を又焼香橋と云ふ
浴室 方丈の東にあり
法水池 南門の内にあり石橋を架す
此餘山門僧堂衆寮等の諸堂巍然たるに天文年中悉く
焼亡せり其後再建の結構なり今の仏殿は東福寺より移す
方丈は藝州安國寺より此所に遷せり
當寺開祖栄西千光國師は明庵と号し備中吉備津の人其先は賀陽
氏羅州の刺史貞政の曾孫なり母は田氏幼にして薙髪し年廿八の時に

仁安三年四月商船に乗て流海に泛ひ宋國明州津に著し嗣法を
虚庵敞和尚に請て南宗の正紛を相兼て帰朝し後建仁二年
壬戌の年當寺を草創し則當院は本朝禅刹の魁首なり鎌倉
大將軍從二位源頼家卿敷地を施入せらるる其封内五條の以北
鴨河原の以東なり時の帝 土御門院深く師を尊仰し給ひ則
勅して官寺となし建仁の年号を以て寺号に賜ふ源頼家卿
同胞の弟右大臣實朝公相継て師を尊敬あり佐々木定綱畠山
重忠等も営造の費を助く 砂石集に建仁寺の塔は梶原景時訴れ後彼妖悲歎に堪ずして造立せる費なり是より
先後鳥羽帝は葉上の僧正と称し奉り宋國の孝宗帝は千光祖
號を給ふ凡て其高徳たるや元亨釋書及年譜に詳なれば今茲に
略せり 国師梅尾明恵上人は方外の友なり蓋師帰朝の日茶実を将来し筑前国背振山に植えしを妙恵に傳ふ既に喫茶養生記二巻を著せり傍来本草
前章の諸病に効験あるを録せり
建保三年七月五日入寂し年七十五今の開山堂
中に石塔あり塔を興禅護國院と號す

河原院古蹟
禅居庵
文殊堂
建仁寺町


建仁寺
南門
摩利支天堂
開山廟所
矢根門
南門
東山三ノ八
東山画


浴室
臺所
方丈
佛殿
鐘楼
當寺惣門南の方ハ
土手ゑ〻堀の代り
竹垣を用ふ世ゑ
建仁寺垣と称し
今ハ石垣植込ふ成
所々みもあり〻
茶家の模範なり
其二
総門
工一堂


惣門
建仁寺
門前
蛭子社
蛭子社
ウラ門
中山画

安國寺恵瓊首塚 方丈の北庭林中にあり慶長庚子乱の時三條河原に梟せられし首級を其族樋口某も得て當寺に埋む樋口氏の裔今尚近隣に住せりや恵瓊が支蹟は關原軍記に見えて人よく知る所なり

中門 南向也にこれを矢立門やいふ軍箭の迹扉にのこるとぞ此門其はじめ小松重盛公の館にありしを中もおかれし門殿宰相教盛卿の館門といふ當寺再建の時爰に移されしといふ

禪居菴 中門の西側にあり當寺塔頭の一なり開基清拙和尚は宋国福州連江の人也嘉暦二年丙寅年来朝し鎌倉五山又建仁寺に歴住し勅を蒙つて南禪寺にも住職し既に大鑑禪師の号を賜ふ暦應二年正月十七日示寂し眼目の後弟子の輩に遺誡の文を認む世にこれを龕破の文と称し什宝の第一とす

清拙和尚像 長三尺許倚子に坐して手を交ゆ 佛殿の左の服壇に安じ壇上に靈祠の額を掲

本尊摩利支天 坐像七寸許 此像は清拙和尚宋國より將来せる所の土をもつて造りたりといふ其面貌白色衣服の如きは着色を用ひ金色七頭の猪に乗る所なり應験あらたにして遠近の信人祈願日夜多く朝暮香烟の間断なし

三輪執齋墓 同寺中東丘両足院にあり石面に執齋三輪希賢善蔵之墓と鐫す執齋は号なりまた躬耕廬中と号す平安の鴻儒なり始め佐藤直方に從ひ山崎派の性理の学を主張せしが中頃より陽明王氏の良知の教を尊崇して專ら修す京兆尹松平紀伊侯も又市令小濱志州等にも之て進講す傳習録四言

教其他世に刊布せる書必らずしも学文の傍和哥を好んでまた能す瀞て當院に壽藏を營て自詠の和哥二首を記す

先塋の傍に予が終の住家を營みたる幸ひ枚の二本ありけるもたえなんとおもひて

たらちねにかへりて此身もなくつきの光を待とてみる枚の二本

枝をもしたすの有りとてやみよかしいつまでもなき

元文四年冬　希賢七十一叟書

斯志しおれしより後五年を経て延享元年正月廿五日七十六歳にして歿し即此墓に斂む今尚杉の高木存せり翁が傳る先哲叢談近世叢語等に委しくはしく今こゝに贅さず

澤村自三墓 前門院にあり要叟居士澤村自三君之墓と鐫す濃州関ヶ原の人本姓三輪假に澤村を称す執齋の父なり醫鍼及び劍を学ひ皆其術に通ず曾て松平大和守源直矩侯に越後より播に遊事し後京師に家居す天和二年九月十九日歿す享年六十六此時執齋尚幼なきをもつて母方の祖父江州長濱大村道與の嗣大村道慈に育てらる道與は京師の巨商白木屋の祖なり執齋六男あり伊織勝全白木屋を継て彦太郎廣全といふ故に執齋が著書并に遺物等今も傳る中にも白三が支蹟は五井蘭洲撰む所の碣文に詳なり其室恭岳妙栄孺人箸尾氏の墓も其傍にあり

大龍院趾 同寺中巽隅林中にあり開基は宝覚真空禪師諱友梅雪村と号す越後の人一山禪師に嗣法す曾て元国に入て諸老師に参謁す元徳九年帰朝して信州徳雲寺に住しまた播州赤松円心の本願に仍て金華山法雲寺を創建せしめて京師万壽寺の第十七世當建仁寺の三十世たり貞和二年十二月二日寂

大竜院趾ふあるを友梅禅師の塔や並ふ古松存し円心譯ハ則村
赤松圓心塔 播州の領主にして初め南朝ふ属し後足利氏ふ従ふ曾て友梅禅
師ふ参禅し師の為ふ法雲寺を建立し又当院を造立せり円心の子則祐即
赤松山宝林寺を建立し禅師を開基ゆ赤松家の菩提所ハ彼領国なれ
ども常楽記ふ應安四年十一月廿九日赤松帥律師則祐まゝ城善他界於建仁寺
大竜菴又奈良云見えるを以て考ふるふ彼れの因をもつて塔を立たるふ
らん円家代々の霊牌をも當寺ふ安置せり坂他正傳院ふ
織田有楽斎塔及好の茶亭ゆ林泉名所図會ふ出たれハ畧之

建仁寺十境 清水山 茅五橋 鴨川水 慈視閣 望闌楼
群玉村 入定塔 楽神廟 無盡燈
慈視閣以下ハ當山の堂塔を云清拙和尚の頃ゆ始まる因ふ鞠林五鳳集ふ
薔薇洞まゝ巽亭の詩ありこれまゝ建仁寺の境地なるゝ今其詩を載せ

重遊洛東旧居 天隱

不向東山十歳餘薔薇院落近何如
橋今再渡寺曾宿松竹依然擁舊廬

巽亭看雪

亭在東南洛水涯雪時會此若袈裟 蘭坡
亞簷木末吹搖地六六諸峯悉是花

松原徒杠 加茂川筋五條河原今松原ゆ清水寺迄人の通路なれハ東岸宮川町
ゆハ小芝居西岸木屋町ゆハ生亀やゆ料理店有ゆ常ふ賑ふ所なり
古五條橋趾 往古五條橋ハ此所ふ掛る近世まゝ松原通の河原十間許北水中ふ
古橋の柱尚存し瀬違ふ寄ゝ折々顕るゝ今ハいるなるや

雍州府志曰斯橋始毎朽腐清水寺本願成就院爲勧進聖請
諸人聚米錢而經營之是謂勧進橋云云
山城名勝志或記を引ゝ曰 後小松院應永十六年新供粮五條橋
園太暦云康永三年八月十五日天晴今朝彼是云東大寺八幡宮神
輿入洛武士奉防之間振置五條橋上衆徒神人退散了
百練抄崇德院保延五年六月廿五日清水寺橋供養也やあるハ此
五條橋の事なる其盛觴ハ嵯峨天皇の勅ふよりて架られ由
水月集 青蓮院尊純法親王御輯ふ見ゆ同集茅廿三巻曰勧進汝門敬白請殊催
遠近之施主受都鄙之懇篤山城國平安城五條之橋造立之狀
夫切利之宮裏金銀水精之橋懸雲路釋迦如來送下天銀河之
波上烏鵲紅葉之橋並翅牽牛織女之成歡會矣爰五條橋者豪
嵯峨天皇敕定今一百餘間之橋梁續東西之大路雁行横月浦貴
賤列紅白之袂虹影卧江流往還之緇素轟歩焉中嶋有一宇之

閣臺以水去都因縁号法城寺小野篁竜神還幽途脱置沓於
此所自尓于蘭盂之齊會六趣之廻回無懈光源氏之停車尋花
主夕顔之宿舊跡屢草滋流之末者河原院移陸奥千賀鹽竈
朝夕之眺望今殘人家之烟誠其地勝絶兮景趣幽奇者歟然而
先年洪水之剋橋柱流落往來之人浸裙於水上下之輩濕袖於
浪依之催諸人奉加成造立之念傳聞自然居士同東岸居士勸人
被懸之云云上代既受男女芳情未世猶以可仰檀信之懇志乎不
謂輕重不論多少施財產以此結縁早渡生死愛河至涅槃岸香
城者七重橋津如畫浄刹者四邊階道瑩玉浄藏之所君終同之
況善根之花報者先立感今生尓者壽福榮耀任意仍勸進之狀
如件永禄九年四月日沙門敬白

茅五橋 建仁寺十境之一也

半虚空裡獨横身接盡中途来到人
濁界衆生何日了誰知脚下是通津　清拙

賀茅五橋落成

道接長安見大成度驢度馬不消爭
玉蝀横影三千丈截断東山水上行　普明

重賀茅五橋

茅五橋荒久卧波奈斯朝往暮還何
雲斤月斧一新日多少人從虹背過　三益

按ずるに清拙和尚は建武中建仁寺に住せ事前に見えたる十境の内五橋の立る所普明は相国寺の二世にして嘉慶二年に寂せり爰に五橋比落成は建武の後嘉慶の間に成るか又三益は建仁如是院の住僧なりしかれば應永の後重ねて此橋成るにや尚考ふべし

太平記に佐々木高氏命を請て五條橋修理の事を薫し京師の
毎戸に課せて率錢を以て經費に給するの期を徳つて成られ
足利高經其功を速にせんや欲し私錢を出して之を造るに百に
して就る高氏甚愧て是を高經に不和に成し事見えたり
江陽屋形年譜に云天文十二年卯十一月十九日洛東五條河原の
橋を造直しへきとて將軍より丹波河内の両國の守護に仰付る

また此橋を清水橋やうに支ハ百練抄の佗明月記ふ建仁二年
九月十三日条八條殿云云五條東自清水橋ク〻メ地路也著聞集云
将軍入道殿そ〻め〻上洛の時清水の橋をこぼたれそ〻る
大嶋武好云清水橋云五條橋乎

十禪師社 松原通宮川甲の東南側 人家の後ふあ之

此社一名車止社やうふまた辨慶社やもいふ往昔ハ境地廣く
樹木森々や繁茂〻〻物見の松やいふもあ之か皆ほろびく
今ハ〻〻俗傳ふ源牛若丸此林中ふ隠れ千人切をなせ〻
やうな之所謂武蔵坊辨慶や此神前やう〻主従の約ふ之
と其事いうなるかや

五條橋上一神童走若流星飛若風
擁面提刀知底物三千徒裏武蔵坊
拠刀眠了神通術自此終身約僕従
芳野安闍多少險郎當扶得舊牛郎　　賴惟柔

晴明社 日通宮川甲の東北ふあ之今堂を構へ清四寺やう号〻阿弥陀佛を安置ス
洛陽阿弥陀廻之第三十二番なり此奥ふ癩疾の人多く住ス世ふ晴明辻子と呼ふ
此地元加茂川の東岸やう晴明冢やいふあり近世ま〻四條河原の
南方を望め此冢上の松見えたり〻か宮川町の新道を開発ふ
せる頃冢ハ平均〻〻次第ふ平地や成〻故晴明大明神の祠を其
所ふ建く霊を祭るふや社傍ふ古木の紅梅あり〻〻花の頃ハ淵漫ス
道観親王の植たまふ所なりや由緑詳なり

梅　うめ　ちなの家ものそかなり　其角

前瀬ケ崎 建仁寺甲松原の辻の四辺をいふ
此地往古ハ加茂川の封境なり

城東寺 日通松原の南ひ〻側ふあり初め天台宗中頃禪宗や成く建仁寺ふ属ス
後ま〻南禪寺楞嚴院志と成る水月集ふハ此寺五條橋の中島ふあるや
記ス編旨喜捨等の古文書類を傳やいふ今ハ形ばかりの
堂遺そ〻く城東寺の額を拘く什物ハ本寺ふ預ら之やう

増鏡云 寛喜元年 是より之はきふ三條ハかきあやう〻の姫君まいり給ひく
きはきたちあ之いみ〻う時めき給ひをむ〻のけ〻ハ此の殿家実
のちむもあるまたおはたく〻おとるまあ之なまひふきこれ

いたくこれをなげきて六條后のみや淨東寺やうに引こもりて
またうせたまふ后せうとの[illegible]
かよひたまへりたまふ云云

東五條院舊趾 今の建仁寺の辺をいふ

文德天皇の御母皇太后藤原順子の御所なり仁明天皇の妃なり
五條后やうに閑院大臣冬嗣公の女なり文德實録曰皇大夫人移御
東五條院警蹕成儀一擬乘輿詔遣左右近衛將監番長各一
人近衛各九人左右兵衛志番長各一人兵衛各十九人分陣
院以下以備宿衛云云

三代實録曰天安二年八月乙卯 文德天皇崩后哀慟柴毀後遂
爲尼請東大寺戒壇諸僧於五條宮受大乘戒屈延曆寺座主
圓仁受菩薩戒崩葬山城國宇治郡後山階山陵后負固天禮
則備母儀之範永古少比深信釋教建立精舍額云安祥寺資

財田園割給甚多

壽延寺 建仁寺新地北南門甲ふあり俗大黒甲やうに下
宮川筋壹丁目なり法華宗本国寺末

本尊 鬼子母神 妙見宮 大黒堂 鐘樓等あり

愛宕念佛寺 松原通建仁寺甲の東北側ふあり坎辺都〻愛宕郷なり去
珠皇寺 愛宕寺やうなれども今八坂寺を專
洛陽三十三所第十六番の順拜所あり
小山號等覺山宗旨八天台宗なり

本堂 南向 千手觀音 立像作者不知 脇士左毘沙門右地藏二十八部
厨子ふ安置

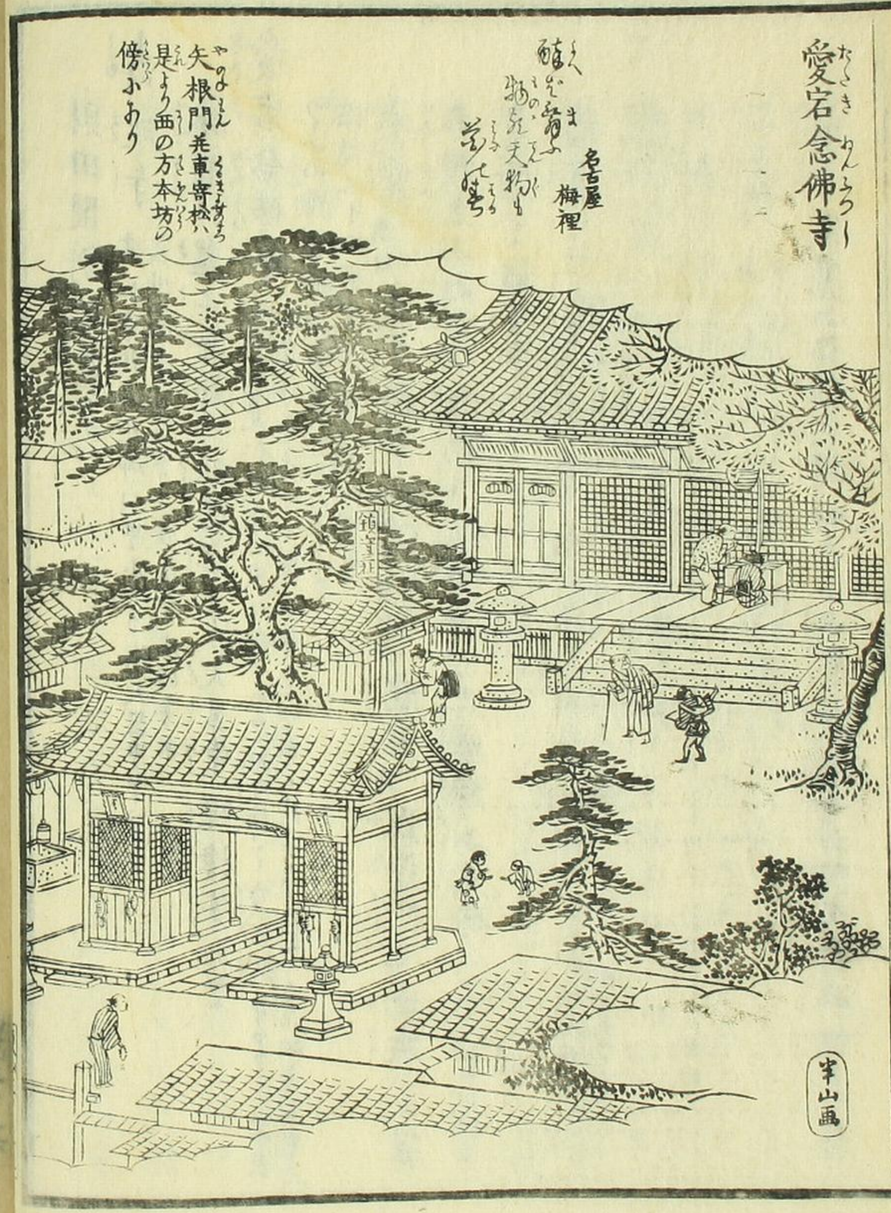
各檀上ふあり 千觀内供像自作 上梁牌ふ文保二年八月十四日

重脩や記せり

鎮守三社 天滿宮弁財天 稲荷等の小社あり其餘近年八寺内ふ調馬の場と
構へ所養奴毎ふ来る遊客を待ち其報馬を借ふ遅々たり春の日
ふハ殊更ふ群競〻ふ徒等の戯ふたふ者多〻 千觀車寄の松 本坊の傍
祇園及安井當所の馬場ハ洛東の一壯觀やうなり
矢根門 日所ふ古き衝門あり 古代の物や見ゆ往昔門脇等
相教盛卿の第舎の門なり矢の根痕有をいく斯〻
二王門 南向惣門なり坐力金剛密迹金剛各長七尺許
坎門俗中ふ在りをまふ秘ふやうふ

當寺開基ハ弘法大師ふ〻中興ハ延暦寺の阿闍傳傳燈大法師

愛宕念佛寺



千観内供なる大法師い中納言橘頼顕卿の息男ゆ〜〜幼名を
則千観丸や〜〜ゆ成長し〜〜比叡山ゆ登て運昭内供の室ゆ入〜若行
終ふ顕密の碩學やなれり生涯乃間常ふ口六字の名号を念〜不絶
この故を以〜世ふ念佛上人や称誉に寺をまて念佛寺と呼ふ元亨釋書
云父母子無き支を患ひ千手観音の像を祈る母夢中ゆ蓮華一茎を
得たり後妊る支有〜観を生て人や好り慈順ゆ〜〜面ゆ嗔色の色ゆ
應和二年夏大ゆ旱ひる〜ゆり朝廷議〜〜観ゆ勅〜〜雨を祈りむ
此時摂州箕面山ゆ在〜法華三宗相對釋文を撰に勅使菴の内ゆ
到つて〜昔を宣ふ観領兼〜〜則菴の後三里許て大なり滝ゆり滝の
上ゆ大木の柳ゆり観師宣使や俱ゆ滝の辺なゆ至て柳樹ふ上つ〜寺ゆ香
爐を擎て〜啓白持念に時ゆ爐の烟聳騰〜〜山谷ゆ満ち黒雲相和〜〜
甘露の雨大ゆ濃々り観及勅使衣を霑〜〜歸る其感應世ゆ賞に
當堂内ゆ置く所の地蔵尊を火伏地蔵や称〜〜毎歳正月二日寺僧経と

讀誦〳〵請人ふ火伏の札を出す　世ふ天狗の宴や〳〵ふ事い此夜八坂弓矢門ふ住む祇園の大神人客殿ふ聚て南北二行ふ列座し其の宴敷に其坐上ふ在る人倍木を持〳〵乱〳〵舞ふれを天狗の酒盛や〳〵謂ふ其元い轉供の酒盛なり其体無豪なり故其音を借て〳〵天狗の酒盛やい謂ふ宴終〳〵ふの〳〵堂ふ登て牛王杖を以て大ふ門の扉及赤壁等を敲き又法懼を吹き太鼓を撃其間ふ寺僧牛王を貼にれ皆悪鬼を攘ふの謂やゝ

西福寺　日通南側六波羅密寺の門前ふあり浄土宗本尊阿弥陀佛春日の作坐像三尺許四十八願廻の身三十一番なり又七佛の地蔵尊を安に弘法大師の作しゝ

六波羅北方茅趾　名跡志云六波羅密寺の西ふ並ふ歌月寺封外坤の藪の本ふ平家の形我て〳〵水あて今ハ平地に成れ〳〵ふ小池あり〳〵二十年前ふ至て〳〵云云やゝあて思ふに元禄の頃まで〳〵かゝあて〳〵れ即北の方の亭其平地の所さへ定て〳〵成ゆき〳〵いや便なき哀ゝなり今て六波羅南方并ふ丙六波羅滅亡の古やい次第ふ出せり

鎌倉将軍宗尊親王の時ふ〳〵所の丙撿断所北方の茅ふ〳〵則此所ふあて建長七年北條義宗を〳〵め〳〵此所ふ有〳〵南方なる式部丞時輔や共ふ改道を執る丙六波羅則是なを

太平記　元弘三年三月十二日合戦の条曰西國の勢已ふ三方よて京中上を下へ返〳〵騒動に丙六波羅驚〳〵地蔵堂の鐘を鳴〳〵洛中の勢を集む

又云地蔵堂の北の門よて五條の橋ふ〳〵出る云云

六波羅密寺　松原通愛宕念佛寺の東南側ふあり宗旨始八天台今真言新義智積院ふ属に寺領七拾石

本堂　東向　十一面観世音　長八尺空世上人作西国巡礼第十七番の札所なりまた洛陽観音廻りの一なり　脇士　南　薬師仏坐像傳教大師作　北　地蔵菩薩　立像作者不知或云白河法皇御作　是當寺最初の本尊古へ六波羅地蔵堂やゝ平判官康頼ら宮物集ふ此地蔵尊貧女の為ふ其母を葬て給ふ支を載に世ふ山送りの地蔵やゝ髪掛地蔵やゝ〳〵を記せりまた檀上四隅ふ四天王像又檀の南厨子に手相國清盛入道浄海の像を安に長二尺八寸余自作やゝ

空也上人像　立像四尺許自作なり　開山堂　堂前西向ふあり

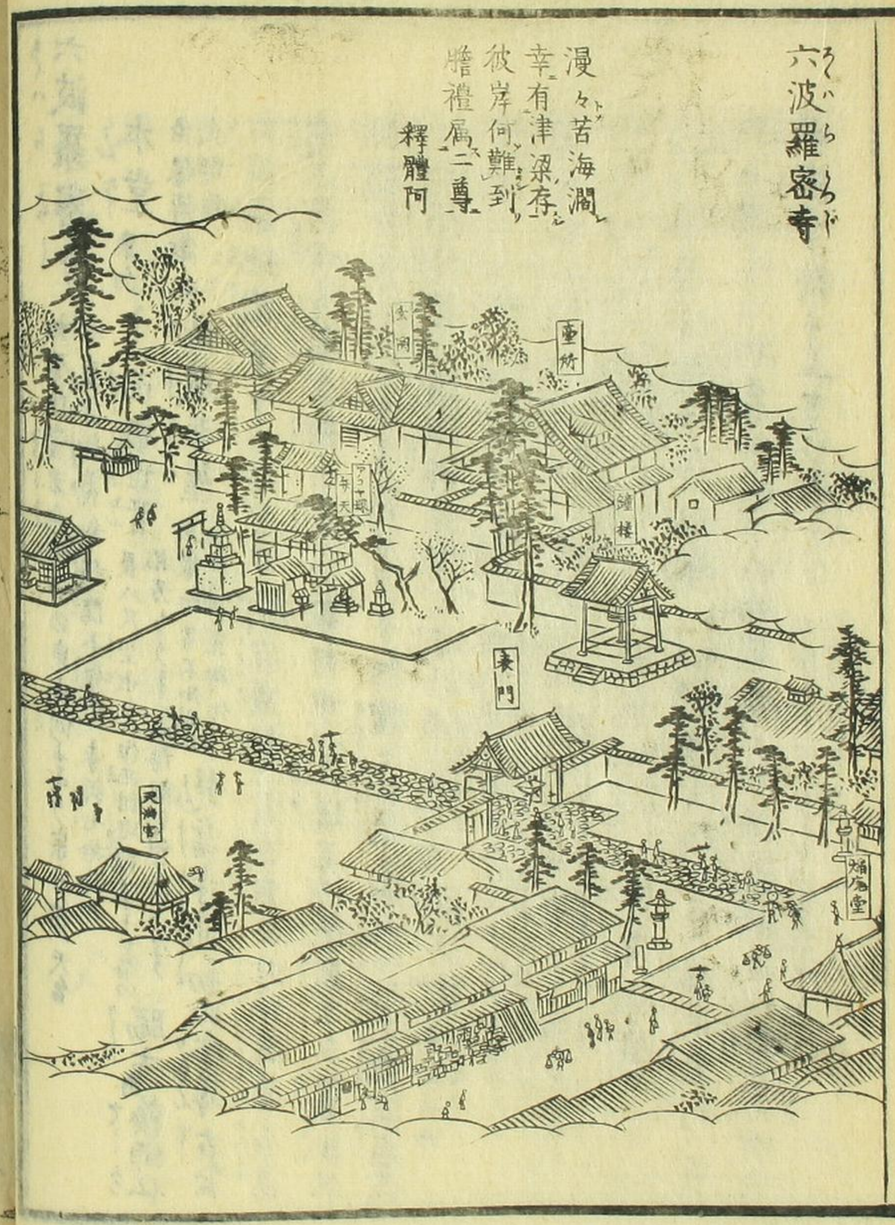
鏡池　開山堂の傍ふあり上人地水をとり〳〵影を写し自射ふ其形を作るやゝ

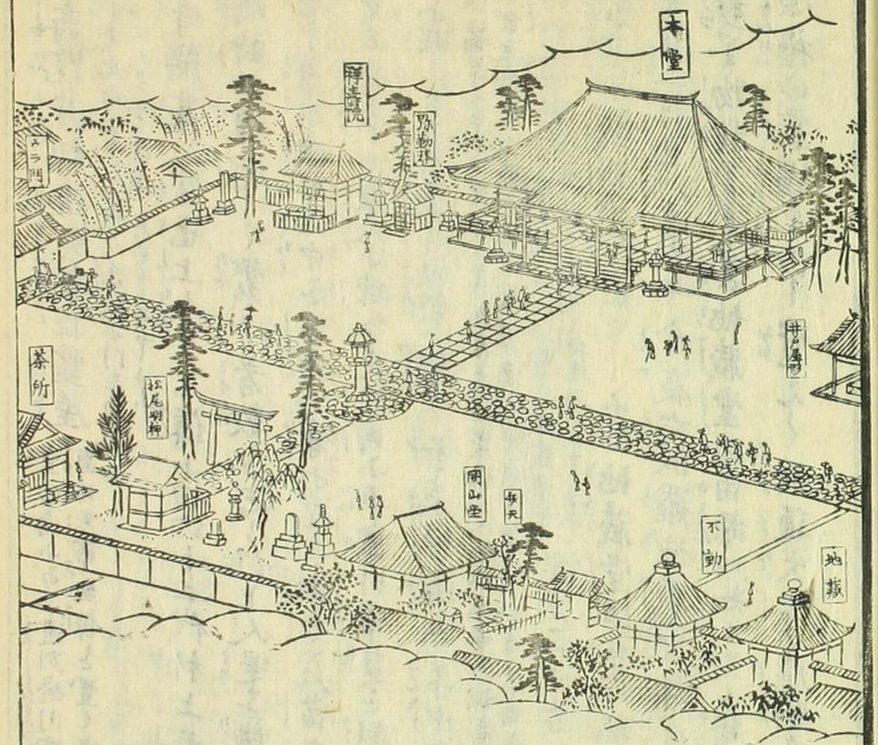
鎮守松尾明神社　日堂の南ふ有　辨財天社　本堂の北土堆の上ふあり誘ふ牛若丸の愛女牛王姫を祭るやゝ

古石塔あり銘字畫威に古代の物なり世俗是を祠古屋塚と称に二尺五寸許　運慶堪慶丙作脇檀　右運慶右堪慶　各自作なて藤原秀衡ら奥州ふ遷〳〵本尊やゝ此尊像ふや源義経衣川乱の須洛ふ飛帰なたまゝ

六波羅密寺

漫々苦海濶
幸有津梁存
彼岸何難到
瞻禮屬二尊
釋體阿





いま當寺の木尊觀音地藏同座の事熊野の謡曲に見えたり又同謡に北斗の星の曼荼羅と有り東は方二三町計に高燈籠に柱に樹く北辰祭り城南淀河畔の目當に毎夜常燈とかやせーが應仁の兵火に焼失し其燈籠の埋れたりしを年金丸宗和庵上京の時寺僧に乞て東武へ携へ奇物と弄びしが今も芝の邸中に遺れりとぞ

半山画

祥壽院井伊直好朝臣霊屋　堂の南にあり遠州掛川城主從四位下兵部少輔直好東帯坐像を置く寛文十二年卒

總門　北向又南門あり凡北に門を開く寺院當寺其ものゝ

當寺開基ハ空也上人なり傳に曰六十二代村上天皇天暦五年京畿疫癘時に流行し斃るゝ者數を尽し上人是を憐み十一面観音の像を造り車に乗せ洛中を自身に牽かせ給ふに當寺の本尊なり観音供せる典茶を疫人に供へ給へ一同に平愈し帝是を聞て名吉例や毎歳元三に服し万民今に此例を行ふ名を王服と称し年中の諸疫を免るゝ

歴代編年集成云天禄二年九月十一日空也上人於西光寺入滅春秋七十

第二世中信上人改六波羅密寺や号しや然れハ日寺多や尚考へし

謡曲の熊野に俊寛大路や六波羅の地蔵堂や　寄るに中古ハ別に地蔵堂有り

彼観音も其所に安置せ　にや地蔵堂の支ハ既に百練抄に嘉禎三年十二月廿八日丙午今夜六波羅地蔵堂焼失や有然るに今ハ星移り物換り　其地蔵堂の由縁ハ知る人も稀に成ゆき　唯西國順禮の霊場やの　覚え　圓通大士の應験高　殊に清水寺に

詣る道筋ちゝ　祈願ちゝ　遊山ちゝ　必ゝに歩みをよせ

終に花に紅葉に春秋の中宿やいとなゝ

琰魔堂　六波羅門前松原通の北側にあり坐像五尺許小野篁卿の作なりやと世に百練抄に見へ　閻王の像や非なりへい鳥部野無常所の入口にへ此辺なり

六道の辻や珍皇寺の支

六道珍皇寺　松原通六波羅密寺の東北側にあり愛宕寺や心に愛宕寺や　宗旨ハ初真言今ハ禅宗の済家に建仁寺中大昌院の兼帯所と院号を大勝院や　六道の東北の地に珍皇寺の古跡や　院内東西半里南北一里なり今建仁寺の東南の隅則

本堂　南向　本尊　薬師佛　坐像一尺余傳教大師作　脇　檀　地蔵菩薩　運慶作

堂前石卒塔婆一基を建る

六道迎鐘　本堂の傍東側にあり毎年七月の十三ヶ年を経て堀出し　自ら撞て聖霊を迎へこの鐘ハ慶俊僧都これを鋳て土中に埋め　別當の法師二ヶ年を待て堀出せ　今を寺僧に僧都ハ入唐せ　撞くるか其声唐土に聞へ　堀出し　撞て　曰く嗚呼便り　此鐘人の撞ける自然に鳴出さ　憐俊僧都大に歎く　宣ひ　件の僧都ハ弘法大師の在所に　思ひつゝ早く堀出せ　其事や古事談に　他に並ひなき希代の霊器　鐘を撞く往昔懐旧の情　銘文に記し　迎へ　今昔物語等に見へ　此鐘の遠境に響く　今ハ寛永新造の

六道珍皇寺
聖霊市

小野堂
補陀堂
表門

本堂
経堂
引導鐘

半山画

東山珎皇寺鐘銘

夫洛陽東山珎皇寺者 嵯峨天皇聖朝小野篁君佗界
後其帰魂現此地而復本身故弘法師開其遺跡而号六
道因安篁君於勝區号竹林大明神従此此地謂通徹于
冥府良有以哉毎歳早秋及盆前廣民男女詣之則如逢
六親亡族加之撞一撃鐘呼迎亡親鐘年年借隣鐘雖神
舊典終不自由仍力募大小衆縁鎔鑄焉彼篁君之廟守
今江重次一日扣予陋室請銘之予曰頃者被悩炎蒸惡
客推枕偃帳不得近傍陶先生管城公故賦伽一章式代
厥銘云

末霜鐘响勝豊山 聞者透過生死關
六道迷情今得度寸筵撃碎五無間

寛永二年乙丑孟秋如意珠日
前南禪寺古澗叟慈稽首誌焉

今昔物語ふ云于蘭盆會の日まうさ女の祖のたゆ著たる薄色の衣を盆ふ
入く蓮葉を上ふ覆ひ愛宕の寺ふ持奉りて〻〻拝〻法々去ふる人あや
かくそ書たりける

たくまうる蓮のうへにをきやう三世の佛も

篁堂 鐘楼の南ふあり小野篁卿の立像を安し腰士獄卒共新作なり篁卿々
参議峯守卿の長子ふ仕ふ後三位の参議ふ叙任し博
学洽聞ふ〻〻和哥を善し美和六年遣唐使の船を乗り病ヤ称〻〻起し
帝逆鱗〻〻〻隠岐国ふ流し七年ふ赦し日十四年
参議ヤ為るまて後三位ふ叙し日年秋本位ふ叙し日十四年
朝班ふ列し日年十二月蘇し篁卿ハ不測の人ふ〻〻其身
の宮に至り車等閑魔堂 篁堂の並ひ西向ふあり
元亨釈書ふ見ゆ
石地蔵 篁堂の西側ふあり立像七尺余篁卿の作 坐像七尺余弘法大師の作傷ふ古き名仏数体あり
或者其一体を取く我庭中ふ置しふ不思議の祟有と以て再び本所ふ
送り返せ
地府通路 當寺の竹林中ふ字あり古図を引ふ寺の艮の隅
あり篁卿この所より地府へ入通ひの池又竹林長者の宮并ふ拝殿
〻〻今ひ〻〻見えに生六道ハ洛西嵯峨ふあり
當寺開基ハ慶俊僧都なり此所を六道ヤ〻〻ふ事ハ桓武天皇延暦
十三年此京ふ遷都〻なる時諸人の葬所ヤ定めなるふゆえ
其後遷都記ふ見えたり空海園珎法師なり當寺ふ寓居せり
源氏相壷巻ふ相壷更衣を葬る 元葬場の故を以く六道ヤ称るよ其遺
相壷巻ふ云ふ有〻〻ふ秀也
風今ふ存〻〻毎歳七月九日十日ふ諸人六道の地蔵ふ詣く亡魂と
迎ふ此日俗ふ清水寺観世音の千日詣くヤ号〻〻彼是の

縁によりて此所に参詣し鐘を撞き 其事蹟ハ慶俊僧都にはじまれるなり 槇の枝を
買ひ 六道門前松原通の左右に商人屋を設て蓮葉早稲穂其他灯燈并供物器等を鬻ぐ 家に携へかへりて霊前
に手向け諸霊を迎ふ俗伝に聖霊槇の葉に乗じて来るとなりとぞ
京洛の老若きびすを継て聖霊迎とて称して両日昼夜とも群をなせり
きはめていふばかりなし

南無地蔵无縁墓 六波羅の東南にあり宝福寺と号す今四条道場に移りこの地に一遍上人他阿上人浄阿上人三師の石塔ありまた此所を鶴林といふ同所に无縁墓あり無宿の者を葬る所なりとぞ

主典辻子光明寺 松原の南六波羅の東にありしところの小路をいふ主人これを主典の辻子とよぶ 按ずるに此地元今の清水寺の滝の下なり南蔵院のありしところなり 南蔵院ハ往昔大和国内山にありて寺号を主膳寺といふ 此れハ主膳の辻子なるを主典とも記せるにや後清水寺の南に遷れしも此辺を内山とも唱ふるも此寺の旧地に因るにや

興善野 興善院の旧地なり六波羅の東の野をいふ弥皇寺地蔵田無量寿月燈坊遠藤家等今畠の字にあり建仁寺中清住院此地を領せり

阿佛家 六波羅蜜寺の東南側にあり世俗阿仏屋鋪といふ前栽に小祠あり阿仏ハ大納言為家卿の後室なりうたゝね物語に云思ひかけぬたよりにて
わきたのちかき所にてけるなき
やまよりも出てうらひかんとて

安井観勝寺 廣道松原の北にあり裏ハ建仁寺に隣る此辺を安井といふ宗旨ハ真言華厳を兼たり光明院と号す境内東西七町南北二町半
寺領三百石 安井蓮華光院の御門主兼帯したまふ
本殿 東向 境内の地にあり奥の社といふ 所祭 中央 崇徳院 左 金毘羅大権現
右 源三位頼政卿 額 竪額 崇徳天皇 冷三霊を合相して世に安井金毘羅と称す
繪馬舎 本社の東南にあり 佛殿 本殿の北西にあり 東向 額 竪額 佛母殿 明正院宸筆
本尊 准胝観世音 坐像一尺四五寸許 脇士 左 難陀竜王 右 跋難陀竜王 共に立像二尺二三寸許 法眼堯海作
當仏殿ハ東福門院の御願によりて明正院御托胎の時御平産の御祈願ありし故によりて建立したまふ所なり
蓮華光院殿 仏殿の東にあり当殿ハ元洛西葛野郡安井村にありしを門主大僧正性演今の地に遷けり其後御門跡代々御相続したまふ
唐門 北向 佛種尼塔 仏殿のうしろ竹林中にあり崇徳院の寵妃阿波内侍此所に葬りゆゑに塔を立るとぞ
清泉 殿内御庭の東にあり内侍の愛せる所の水なりといふ
阿弥陀堂 東向唐門の北西にあり 御影堂 阿弥陀堂の上にあり南向 中央 後水尾帝宸影
東檀 東福門院御牌 西檀 明正院宸牌 共に厨子中に安ず当御堂ハ明正帝の御黒戸の御殿なりしを遺勅によりてこゝに寄附なしたまふとぞ
鎮守社 御影堂の西南にあり神明宮 八幡宮 春日明神の三社を祭れり

安井観勝寺

金毘羅

裸参りの

木の間

蒼虬

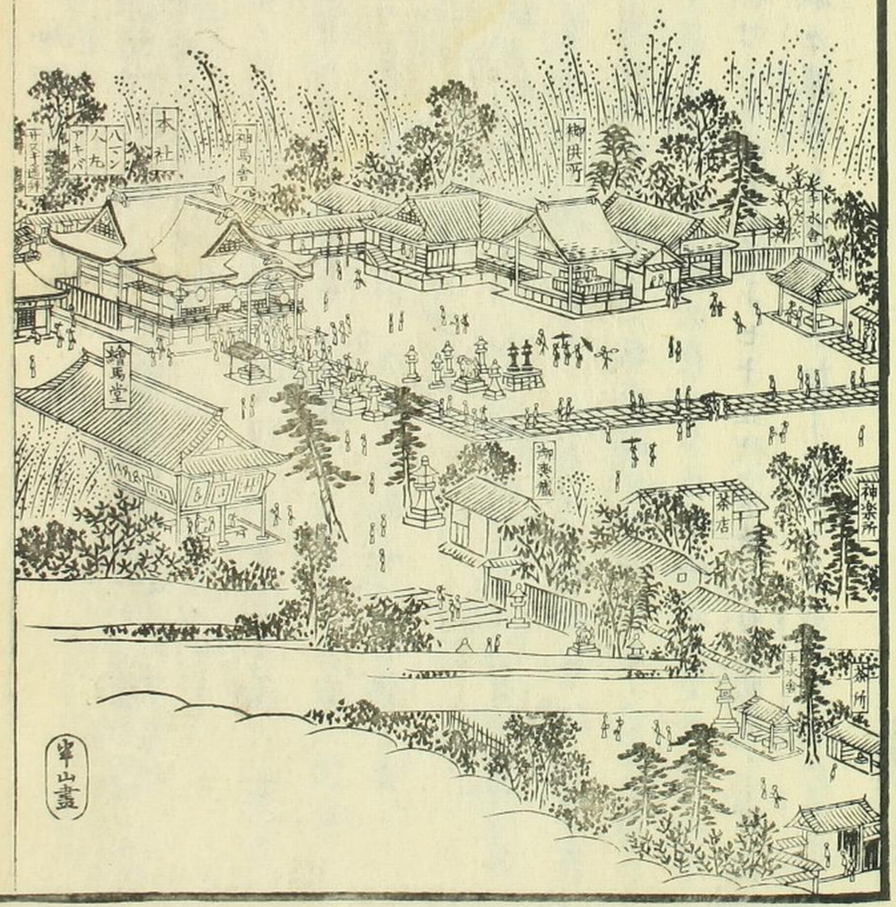
其二 金毘羅社

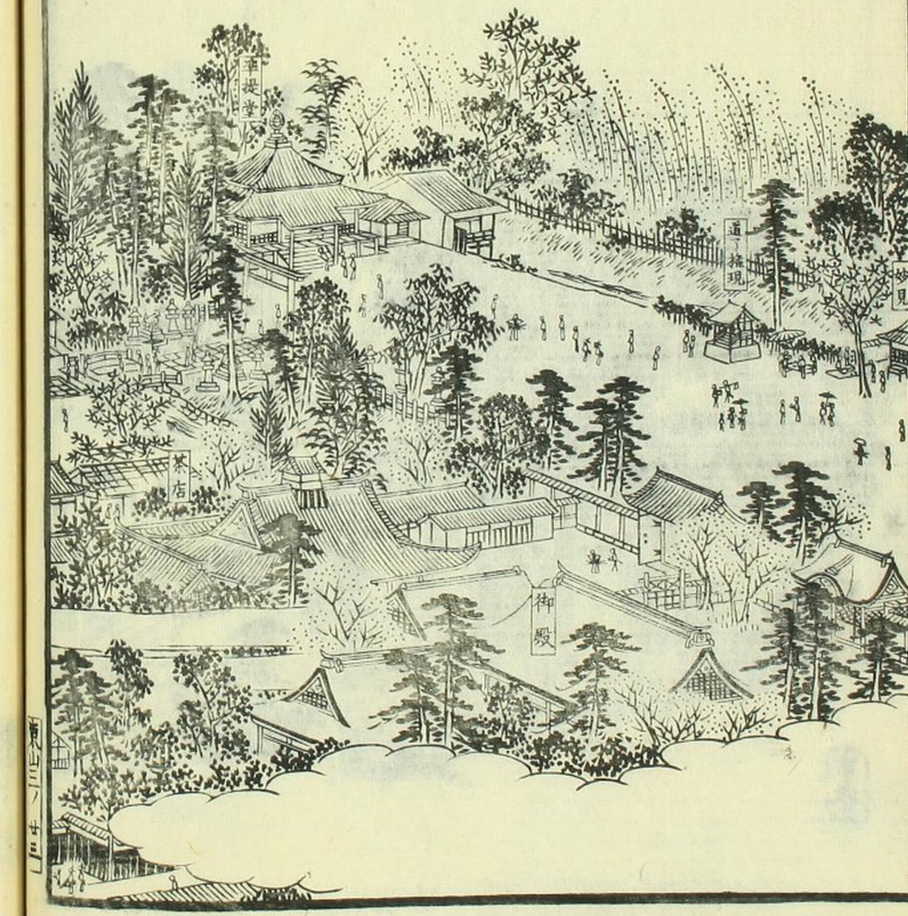
陪二品大王遊蓮華光院應令得空字

自註云庭上有紫藤及躑躅相傳藤者大織冠藤公之所植躑躅者崇德帝之所愛也故五六句及此

別業高開林樾中
蕭然恰似入仙宮
麗眉書客滿堂坐
纖手佳人掃地空
架上垂藤千古紫
巖邊躑躅幾春紅
歡從鶴駕陪勝宴
自喜恩波及此躬

原龍鱠





毘沙門堂　御影堂の北にあり
藤棚　本殿の東北にあり表門の内に有り晩春の頃いゆるの色の深く咲乱む浴下藤花の一名所なり彼帝のめくひ出
往昔のたゝるを思ひ出
一入賞玩
新古今

ほゝゝきにあ井の藤なみ　天暦御製
ゆ藤のたゝみ　汝村
底ゝも移時なこ　洛々

惣門　東向四脚門なり門前に下乗の碑
南門　惣門の南半里許にあり数門内の道近頃新に開造せられ燈籠鳥居
馬繋き等あり
また紀店等も新に成り本殿に詣人の便をなす
当寺草創は平安城遷都已前なり春日大明神垂跡なりの
霊地なるゆゑに此故を以て大職冠鎌足公此地景を愛し給ひ
自ら紫色の藤を植て家門の長久を祈り給ふ往昔は此藤
花の寺と称せしなる時に七十五代崇徳天皇藤花を愛し給
ひ此所に数々鳳輦をめくらしなり然るに或時白衣の童子忽

然と現し此藤花に腰掛し大職冠の植たまふよしを奏し帝
信敬浅からず則此所に殿舎を営み寵妃阿波内侍を居住せ
給へり御幸をなしたまふ然るを保元の兵乱に及ぶかゆ
へ讃岐國松山に遷幸まします讃岐院や申奉る内侍も
尚此所に止まり且暮なれたる空をのみ眺めたまふ
其後讃岐國より御形見やとて御自筆の尊
影并に御随身二人の像を画きたまひて内侍に贈り給ふ
また彼所に於て書写したまふ所の五部の大乗経に御製の
御歌一首を添たまひて都の内に収めん事をや仁和寺の宮に
よりて奏したまふ

濱千鳥あとは都に面をやる身は松山に言伝のこす

然るを次納言入道信西もし咒詛の御心も有んやと讒しなせ
御経は都に入れまゝ其儘に返されそう讃岐院此事を深く

憤らせ給ひ十八萬六千魔王の棟梁やなんぢ〳〵天下を脇ろからひふなんや誓ひたまひ御指の血〳〵を染させたまひ〳〵
一の御願文を震ちせたまひ彼大乘經の御筥ふ奉納龍宮城や
記〳〵堆途やいふ海底ふ赤沈め給ふふ忽ち海上ふ燐火燃出童子
波上ふ舞蹈せ𪜈是を御覽〳〵所願成就なせ𪜈やと宣𪜈なひ
其後い仏髮を除きたまふ〳〵唯々人間の事を斷ち給ふ六年ぢ
經〳〵長寛六年八月廿六日寶等四十六歳ふ〳〵崩御〳〵給ふ
尊骸を讃岐國松山の白峯ふ葬𪜈奉るさふふ故鄕の御事何
ふ〳〵御心ふかりせたまひ〳〵るふや御尊靈此地ふ現〳〵なまひ
夜ふ〳〵光𪜈を放ちふ洛下の良賤おそれかしこみ〳〵光堂や蹈
せ𪜈斯〳〵亀山院の御守大圓法師やいふ〳〵密家の碩德修練の
行者あ𪜈彼靈光を見〳〵即ち此所ふ參籠〳〵跌跏持念ふ一夜
深更ふいたるまで崇德帝尊体を現〳〵なまひ〳〵勅〳〵

此所ふ來縁あり支を示宣〳〵給ふ𪜈大圓深く此義を感歎幷
伏〳〵則奏聞なり〳〵勅詔を蒙ふ〳〵文永年中此所ふ一宇の佛
閣寺院を造立〳〵これを勸勝寺光明院や号〳〵尊靈ぢ鎮め
奉𪜈大圓住職〳〵法施不退の所やふ〳〵尓〳〵後歷代の帝王
御修造有〳〵か中頃兵火の爲ふ燒滅〳〵唯ふ古趾のみ殘𪜈を
元禄八年洛西の安井村ふ𪜈蓮華光院を迁され〳〵ふ𪜈彼舊
支を慕ひ新ふ讃岐國象頭山の本社と換〳〵給ひ殿舍花蕚善
美を盡せ𪜈頃年まで新道を開き詣人ふ便なる〳〵ふ𪜈い〳〵
都下の泰詣常ふ間斷なく別〳〵毎月十日ふい昼夜を〳〵ふ遠近
歩〳〵ぢ運ひ祈願を掛く境内門前ふ種々の商人群出〳〵大声ふ賣響
巨擘なる其賑ひふ〳〵ふ崇德天皇金毘羅大權現一体ふ合〳〵なまふ
和光同塵の誓ひを施〳〵愛愍擁護の明時を乘なまふ靈驗い
ちはく貴かりけや

又當寺門前東ハ東山の美景ヲ對し前ハ真葛原一面の草野ヤ
く其景致所謂信濃國なる更科の風致ヲ似通ひたるヤく
新更科ヤ称し中秋の良夜なけるなる清光明月の頃ハ遊人
騒士来集しく詩哥ヲ弄ひ酒杯を傾くし雅境なるしか今ハ人
家軒繁く立並ひく敘風景ヲ成うるく唯月見甲の名のみ残る
たれヤまもまた昇平盛大の美事ヤいくもしか門前甲ヲ肉楼
客四時ヲ徳とし来集し遊魚酒宴をひらける俗ヲ萬寿庵ヤ称ふ尼僧住せる

萬寿山蓮乗院　観勝寺の北ヲあり宗旨ハ禅宗ヤく六波羅密寺ヲ属し

本堂　東向　中央　崇德天皇の霊宮を安置し額崇德院

崇德天皇陵　并佛種尼塔　本堂の南西ヲあり仏種尼ハ知足院公種公の女郎波内侍崇德天皇の寵妃なる帝讃州ヲ佛種尼ヤ号し御の後落飾

當院今ハ観勝寺ヤ其間ヲ人家を隔く別院ヤなるたれヤ元来按ふ名跡志ヲ佛種尼塔と観勝寺の境内ヲ此邊人家なき以前ハ観勝寺の封境なるしか

ある也ヤ此以て見るべし崇德帝の尊霊京師ヲ現し夜々光を放つ
ごとくなるの光堂の跡ハ今の観勝寺の地なるん漸後金毘羅の社殿造営盛大ヲなり
崇德帝の陵墓ハ跡廟しハ其往昔の旧跡ハ
坎方ヲ引移せる思ふ尚考ヲ俟ん

鬼子母神　安井門前毘沙門甲ヲあり東側路子なる本尊鬼子母神石像ヲ
八寸許なり近年人家の井中ヨリ出現なるく所なり相殿ヲ毘沙門天
摩利支天を安以洛東の男女霊験
祈誓ハ諸人更ヲ間断ヤ

崇德馬場　今其地詳ヲ崇德院の社の馬場ヤなる義なり往昔ハ社頭も大架
廣大なるハ鳥居と東面ヲ立く道路の南北ヲ並樹
社前正面通ヲの新道を今の崇德馬場ヤ其封境ヲ近年開造成し
其辺ヲ又遠く此御直ち下河原筋ヲ出牛王地社ヲあるれるヤ
崇德馬場ヤも思ふ古ハの馬場ヤ

宮之辻　往昔崇德馬場の中ヲあり名跡志云其所今を以云ハ安井の東門ヲ
南二十五間ヲ當つ彼馬場なり辻ヤ其中南北ヲ通く街あり此の際
北ハ祇園観慶寺薬師堂ヲ通ハ南ハ五條通清水の坂面ヲ至る宮の辻ヤハ
彼所西ハ崇德宮東ハ下河原牛王地宮ヲ通く其中央の辻なり謂なり今當
此巷ヤ人家立つき其ハ人を素ひ遠く

妙法院舊地　并堅ケ池跡　安井門前通下河原西
此地ハ妙法院御門跡尊性法親王性恵法親王の住せ給ひ御室
の旧跡なる御室の名を小坂殿ヤ称し又四條の慶運ヶ往生秘解ヲ云綾
南なれハ綾小路殿ヤ称ヤ

小路に申し侍る後高倉の皇子天台座主に備へ奉まゝせ給かなきなくまゝ給せ給頃住なまひ給小坂殿の棟に鴉の群居て御池の蛙を啄なくひろひ給を悲き哀に堪たる云云徒然草に曰く綾小路宮の御所に小坂殿の棟に居つゝ縄を引き給へる彼なん思ひ出られ侍るに誠や烏のむれ居て池の蛙を啄ひろひ給へる御覧じ悲ませ給ふ人のかたらひ給へる

太平記に云佐々木道誉西郊東山を小鷹狩に帰り給ふ妙法院の御前を打過るやうに跡に付たる下部共に遣はし彼院南庭の紅葉を折しむるに折節宮御眺の時に御覧あれを制せ給へる彼坊官一人出て何者そや制に折節山法師あれに宿直に居給へる打擲に門より外へ追出に道誉聞給へる門主に申給へる此道誉の内者へ向て左様の夏翔なん者に不覚や忽に自ら三百餘騎に勢を率て妙法院御所へ押寄て則火を掛たり折節風烈敷て餘烟十方に靡き給へる建仁寺の輪蔵開山塔并に塔頭瑞光庵同時に焼上る門主は後の小門より徒跣に光堂の中へ逃入給ふ此悪行に依て山門より頻に訴て道誉を上総國山邉郡へ蟄居せしむ云云 光堂は今の安井観勝寺の地

菊水井

安井門前人家の間路傍の東に有る故に号る其下流は今石橋を架られ安井境内祇園の社前を通る雙流に走仁寺を過て鴨川に入る此井水い殊に潔泉にして手に掬れば炎暑の苦熱を忘れ茶に和れば以て一層の雅味を出せる故に好事家賞玩に

噌々堂

同門前通の東下河原にあり門柱左右に片仔の碑を掛たり即噌々堂自筆にて我酒妙々天下妙伊丹雙白價不渝の對句を書る此他額もあれ共既滅して讀難し酒店を構へ蒹葭の田樂一種を賣る後の主人は書を能し又画も頗る風韻あり此所は文雅風流の客毎に来つゝ詩を吟し種々の料理を出して此所なりの一名楼と挙今は

うくひすの今を出つゝんきく谷の下紅葉の言なくおくり　噌々堂やそみ子

牛王地社

下河原の南にあり祇園の摂社にして牛頭天皇播州廣峯より降臨あるゝ舊跡なる故に古木の下に小社を建て百度参百度大略の夏の前巻に出たり

真葛原

祇園林より東へ四山門前に至る北は知恩院山門の辺より南は東大谷の辺まで

此地は洛東閑寂静の原野にして秋日の殊に名に於ふ

真葛の裏葉ならで悲しからも今は洛下の騒客

遊興の往返所なきに四時共に春色ある田園なれば

ちかく近き頃より此所に作り出せし多福豆の味ひ美なり

洛東の一名佳品を添たりけり

我恋はまだ時知の深草の葛原に風はらまるる夕べ

慈鎮

風はらまるる夕べ葛の葉の裏にあらはれて秋のやはらぬ

全

櫟を紅葉に染る敷ふ

景樹

葛の葉に生る葛の花

其角

葛の葉の裏にあらはれて恋ひそ葛の花

言水

祇園会やまくまの風はらまるる

蕪村

古猫やまくまの風はらまるる

三津人

葛原春雨二首

梅後猶遅芳信風春寒多少厭嬌紅

一簾細雨無人影茶煙数銭山色中

中島規

蕭寺結隣多綉戸春雲淡々箜歌舞

何客擁他崔小紅醉聽鐘事巷辺雨

全

圓山安養寺

真葛原の東にあり宗旨は初天台にして延暦寺に属す

今時宗国阿弥陀宗にして末寺十一石坊六軒

本堂 西向

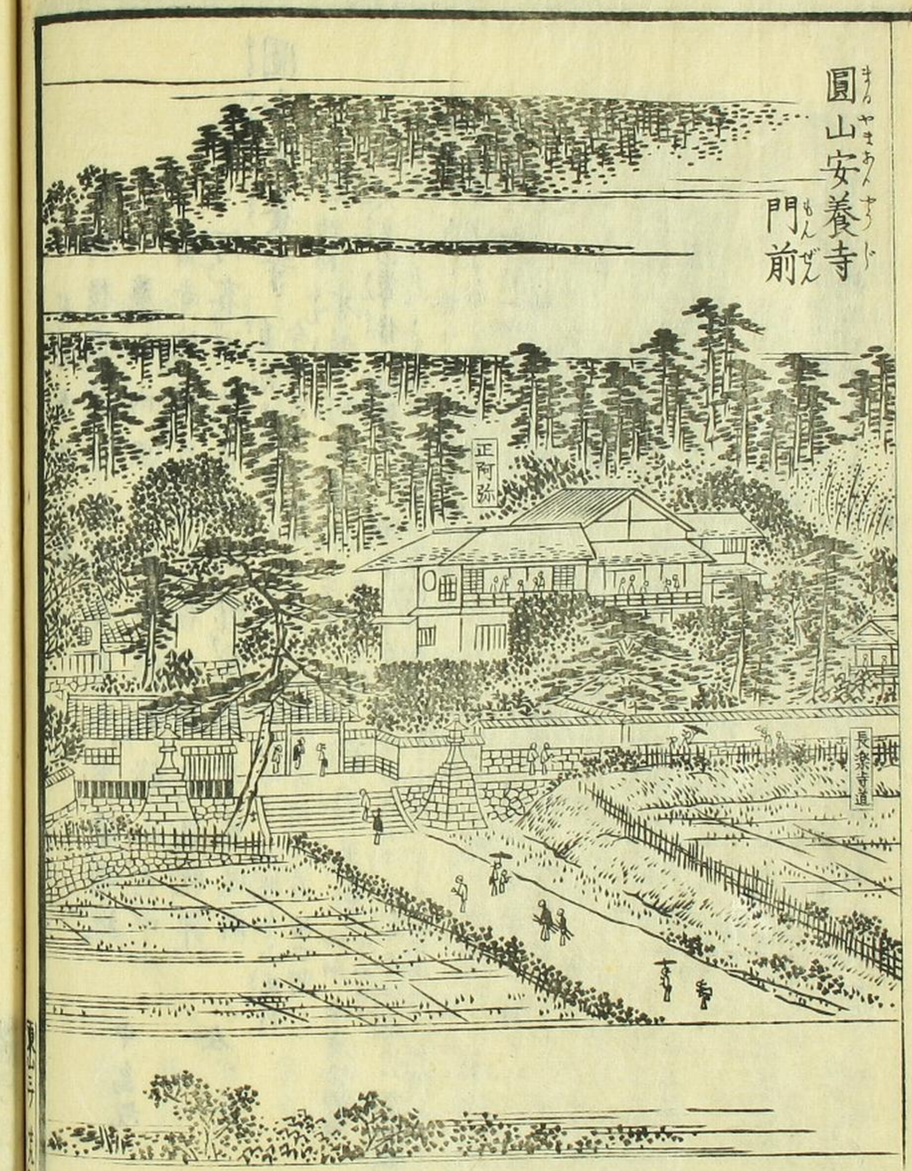
本尊阿弥陀佛 立像二尺余 安阿弥作

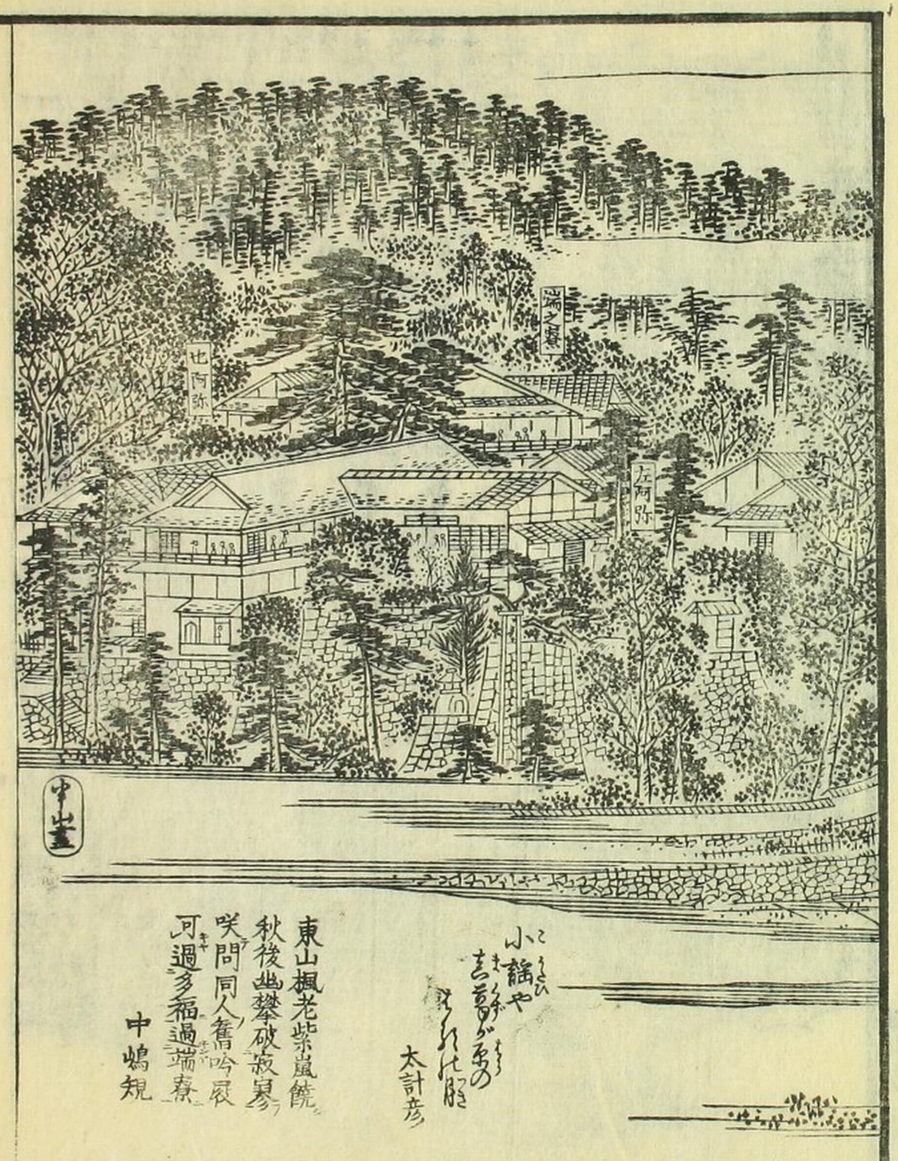
辨財天社 西向 本堂の西南

弁才天女の尊像は秘仏にして拝見なし夜と詩はれば或云中古當寺住職の一老僧慢心を生じ弁才天の尊像を拝見なし我もまた當山の一老職なり且暮法施を奉る上は有縁無縁の身なり尊天秘仏たりとも何の崇りあらんや衆僧の上に立て不肖遂に獨り社檀に入て神扉を開き尊像を拝し一拝なりとも老僧の眼中を射たりと猶熟視なんに時忽尊像より赫々たる光明大に恐驚して神扉を閉て其侵犯せしを衆僧此体を見て介抱して坊に帰り種々法施を奉れども尊天の神怒を宥め奉れども老僧漸々気息尤に復し命を全ふせり夫より八所明音せしかるに癒験神速なる霊像なりと故郡下の良賤こゝに鳴東の妓娼等信心崇敬香花を捧げ間断なく運ふ者頗る夥しく例月巳の日に殊に群集し例年四月九月の朔日に弁天講と称し當山坊中に諸人に酒飯を賚し洛下の男女大に群衆して曼を争ひ求む一壮事なり

吉水の井

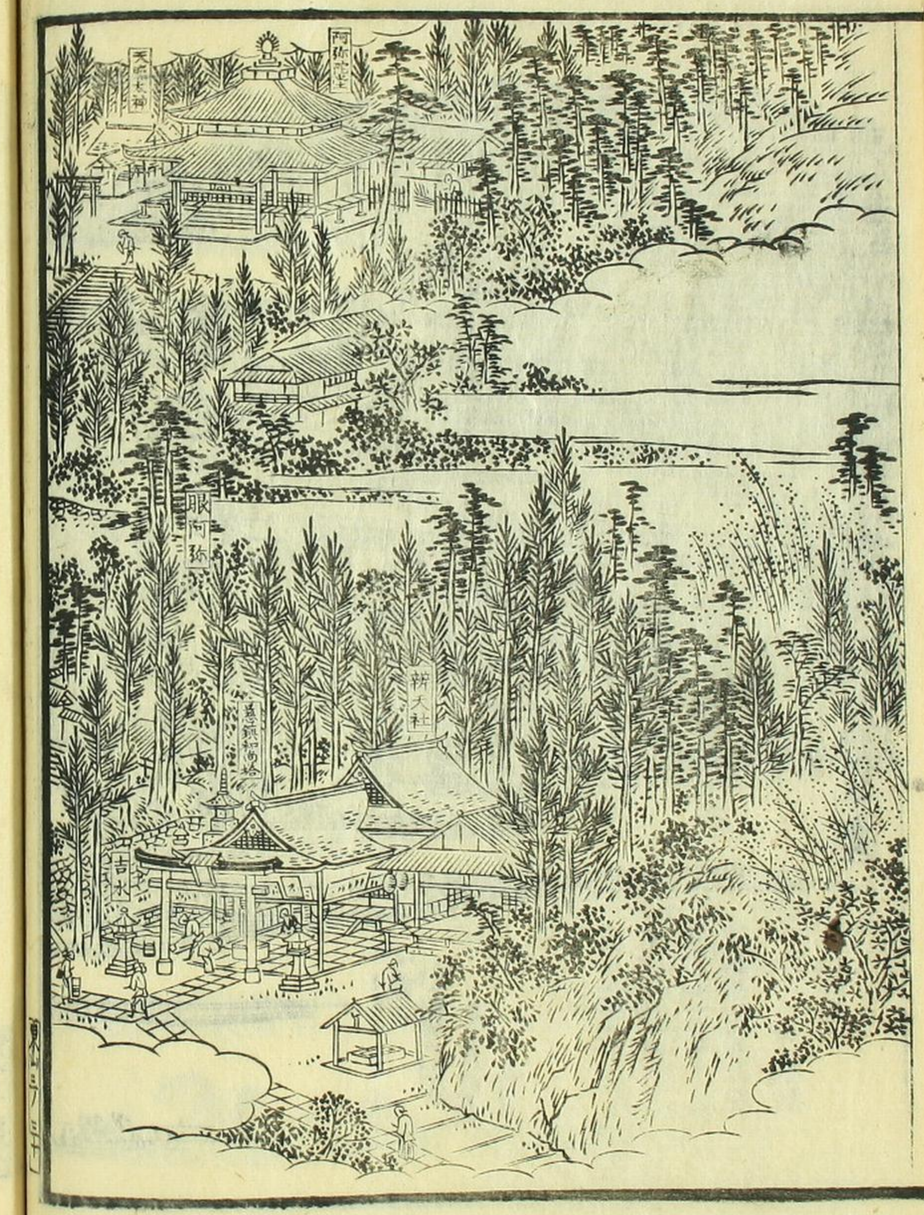
弁才天社傍端の寮の石階の下にあり清泉なり此地の清泉に故吉水の井と称ふ此辺の惣名なり往昔慈鎮和尚常に此水を汲たりけり吉水や秋ふかしと詠じたりけり慈鎮と吉水の和尚と称ふ此地に住給ひ故なり伴の由緒あり今に青蓮院宮御代々毎に一代初度の行法あり

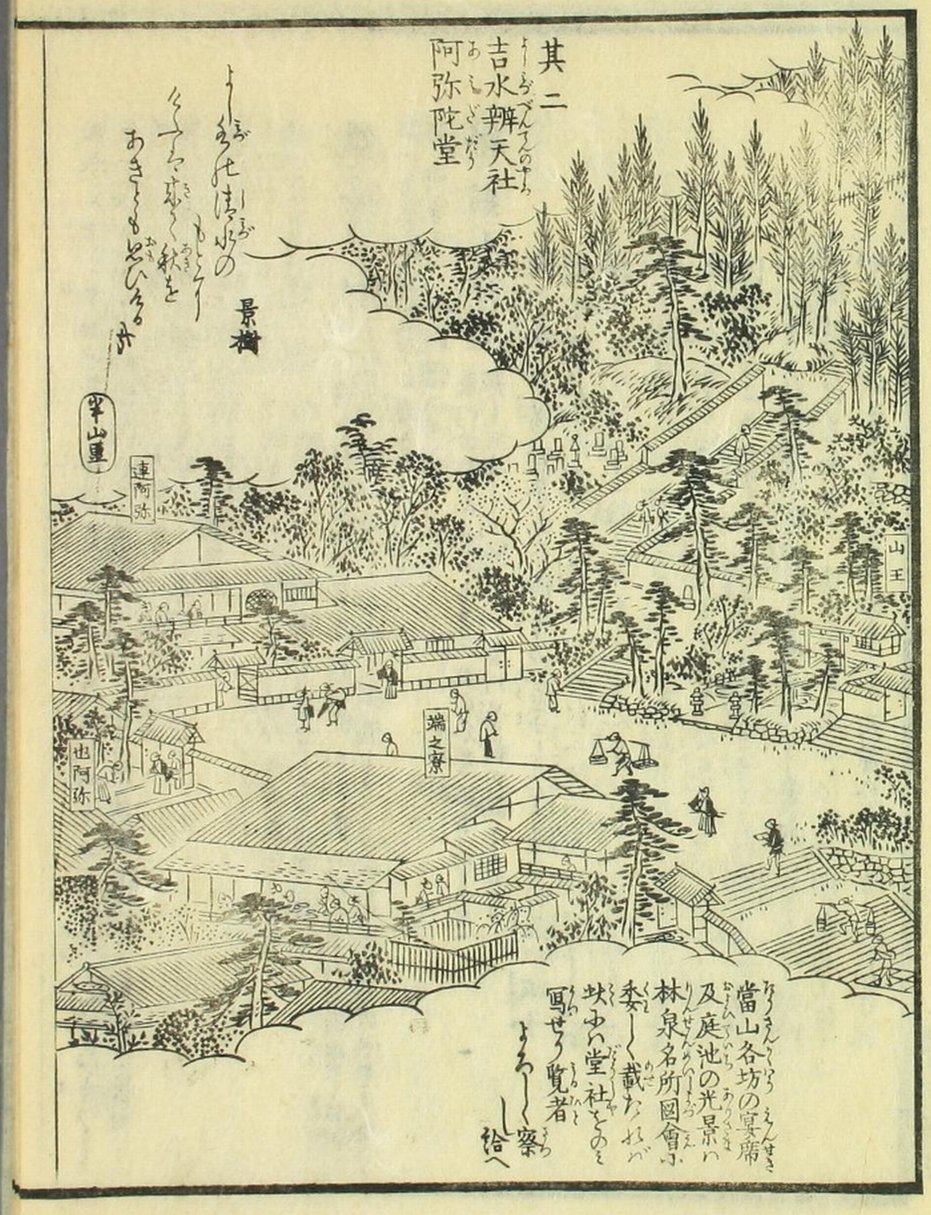




東山楓老紫嵐饒
秋後幽攀破寂寥
咲問同人奮吟屐
可過多福過端寮
中嶋規

小鶴や
吉野の雪の
ぐれた解
太計彦


阿弥陀堂
天照大神
眼阿弥
辨天社
吉水


其二
吉水辨天社
阿弥陀堂
景樹
半山里
連阿弥
山王
端之寮
也阿弥
當山各坊の宴席
及庭池の光景い
林泉名所図會ハ
委〳〵載なれば
吹ゆい堂社をのゝ
写せる覧者
よろ〳〵察
給へ

坎水を以て用伽とす夜深更に及び附法の師此所に来たりて待つ
水を汲むを例とす其式甲冑を著し侍法師前駆白衣を著せ
僧水桶を荷ひ御門主の乗輿に従ひ来倘しき
其体厳重の行粧にて人を圧する甫然たるむ

慈鎮和尚塔　吉水の北上壇の地にあり

雲生寺道八塔　日所尼阿弥の内にあり織田有楽斎の子なり
俗称織田主計頭頼長又道八号は信長公嫡孫

鐵砧石　吉水の傍にあり鍛冶工栗田口藤四郎吉光當山の弁才天に祈誓し名剣を
鍛造する所なり當山の石をかつて鍛盤とす吉水を以て聚の水とす鍛
ふつゝに名誉天下に現ずと鍛盤石
今尚弁才天の社壇の下にあり

鞴財天献燈　表門の前南側にあり三絃の名誉塩寿々女の
表門の前南側にあり香川景樹の誌する所
銘文あり

坎一基を捧げ奉る塩寿の名を改め
天性聡敏寺の道に堅くつゝに三絃の奥秘を究め近代の
名人なり式部に推らるゝ
淫に流れず人を
出世せざる行状の名子なられや合奏する時は
汗を流めり已その使用と学んで高
らへなり式部に推
一撥破るに堪へず
久しきふるまひ神明しるし慈恵涌躍したまへ
はるんやりて云
ふるさとにたちやかへりつせのあれまのお衣
洛東の老僧

當寺は始め傳教大師の開基にして延暦寺の別院なり往昔慈恵
大師の木像を安置せる由寺記に見えたり中頃衰頽に及び司職たる
者なし因て建久年中青蓮院慈鎮大僧正中興したまふ其後時
宗の僧國阿上人に當山を譲つて今に連綿として諸堂建立の願主な
後小松帝の御宇源昭やゝ琵琶法師あり常に當山に参詣して
て祈誓せられ生涯の願望禁闕に参内して我芸事を奏せしに
あり中所願を充たしたまへり諸堂を建立して遂に
感應を得て芸名聡聞に達し雲上に呂して秘曲を奏せしに
聡感斜なりて撥拍の僧位に任ぜられ紫衣の法衣を賜ふ是
即盲人紫衣を著するの始なり故に志願成就の恩謝の為

諸堂を建立せらるる
當山の坊中勝典庵正阿弥長寿庵左阿弥花洛庵重阿弥（又端の暮とも）
多福庵也阿弥延寿庵連阿弥多蔵庵源阿弥等各書院より都下
西野を一望し景致他に比類なし又庭中小石を畳む
飛泉を催し池を鑿て種魚を育ふ緑樹芳草四時の美
色を備へ點茶の席蹴鞠の場を構へ遊宴の設けなし
故ふ都下いもとよりも遠境の登客必ず此諸楼ふ遊興を催し
亘たりて實ふ洛陽観莚最第一の勝地なり

東山安養寺千句連哥の會席詠歌

一ゆきとまるかふはなくめにちるやまのかなたの川ふ　道遥院

春日遊四山芙容楼

二月東山闘雁華、面楼、遊賞興無涯、
杯中、緑蟻忘憂物、筵上青蛾解語花　岡崎元軌
嬌舞迎風翻錦繡、酡顔映日對烟霞、
晩來坐客皆頽放更笑接籬似習家

自將鐘磬換笙歌、精舍隨縁近綺羅、
半夜人歸芳樹月、衣香巾影拂蹊多　禹餅居士
自注云四山數院古昔皆屬延暦
寺中世紛乱別立宗門昇平二百
年竟化成繁華行樂之域都人毎
僦其楼院作行酒糾觴之遊者晨
夕不絶云云

芙容秀與碧雲侔最好東山第一楼
扁榜各観時彦華華歌墨舞闘風流　全
自注云芙容楼碧雲楼東山第一
楼皆在四山安養寺近時文士龍
草廬大江玄圃永田観鶯輩書其
扁額

漕出せや糸山寺をとゝ形のうを　淡々
ひらけあや赫を白玉木枯るより　士朗
蹴あげたる鞠ゝ若葉の彩り那　柳後
ゆきとけ風も　霞川

長樂寺
山寺に入るの
こゝろのそこ
八田知紀

丙午仲春被明舊起遊長樂寺
上方高出翠微巔眺瞰神京横眼前
寺隱林間多不見山環郭外遠相連
是綱吟弄四禪地顯業嬉遊三月天
人去鳥帰花片々鐘聲劉亮白雲邊
六々山人

東山長樂寺　円山の南にあり宗旨始天台国阿上人再興後

本堂　西向　本尊　千手八臂十一面観世音　立像一尺三寸許　厨子中に安し　厨子は東福門院御寄附

額　竪額　長樂寺　青蓮院道澄法親王筆

辨財天社　本堂の下西にあり当山の鎮守にして傳教大師弁才天女の降臨し給ふと拜し則当寺にて作り奉る所の尊像なり

鐘楼　本堂の西　方丈　本堂の北西にあり方丈の前に林泉あり相阿弥の作る所なりや其景致甚愛賞すべし

秋葉権現社　方丈の西の傍にあり　功徳水　本堂の前東の山下にあり清水をふ往昔天台の沙門隆寛律師やうの人慈鎮和尚を師として出家し号を皆空無我やうの台宗の学問をし能教理を究め後法然上人に帰依し遂に徒弟やうの専修念佛の行者となり当寺の封内に別院を結び住居し封内に坂房やうの所に念佛安心の法脉を立て小坂義信と他念義やうの念佛を修し臨終の念佛を唱へ入寂せんやうの時酔弟を集め律師行年八十にして終に往生せんやうの時酔弟を集め忽然として涌出せる清水なり故に小坂房や号に念佛時に涌出せる清水なり此池水よりも忽然として涌出せる清水なり故に小坂房や号に念佛華池と功徳水の号を生じゆゑに此池水よりも忽然として涌出せる清蓮華池と号す

山王社　功徳水の上にあり

当寺は延暦二十四年桓武天皇の勅命によりて傳教大師開基建立し給ふ山所なり此地の形勢唐土の長樂精舍に似たりとて以て長樂寺と号し本尊観世音は傳教大師入唐して帰朝の折

洋中にして俄に悪風吹起て黒雲天を掩ひ白浪地をまきて忽ち船を覆へしなんとせし大師其時船の舳先に出て一心に波浪不能没の文を唱へ大慈の悲願を持念したまふに不思議なり哉激浪漸くおだまりて白亟なる海上に一条の瑞光を現じ其光り近くに随ひ来りて龍神形を現じ頭に観世音の像を載きて来る大師礼拝合掌したまふ忽然として此尊像師の袖より上に飛来りたまふ然りと師当寺に将来して本尊とし給ふ今猶本尊の座下に幡竜を置き其は龍神随喜の相を表し給ふ是まで大師の作なり然るに年月を経て頽廃なせしを天文年中國阿上人中興して時宗を兼ねて御再建の後水尾帝の勅願によりて所なり

安徳天皇御衣幡　当寺の什宝なり帝は人皇八十一代の天皇にまします御父は高倉院御母は建礼門院なり文治元年三月廿四日長門国赤馬関の沖に御入水なり建礼門院帰洛後御落髪あり時戒師印誓上人に御布施として天皇の御衣を進せられしを上人懇

作り奉る御菩提を訪

建禮門院御面像　筆者不知長一尺四五寸許浅衣白衣合掌左ハ向ハ御歳廿九歳の影なり西海より帰洛後門院ハ平相国清盛公の息女高倉院の皇后なり御諡節　洛北大原の寂光院ハ閑擬したまふなり

平家物語云女院ハ文治元年五月一日の日御髪をおろしけせ給ひ御戒師ハ長楽寺の阿證房の上人印誓やうを聞ゆ御布施ハ先帝の御直衣やうを先帝海へ入せ給ひし時ハ甚たり召たりし御移香も盡し御形見やうを西國より持たまひたりしかとも世まうも御身を放たずやうを思召やうを御布施ハ成るき物なりき故彼菩提の為ハ〳〵泣々取出はせたまひしを上人庵室ハ帰りの御直衣ハ〳〵十古流の幢と縫ひ〳〵長楽寺の常行堂ハかけ御菩提をやうを奉り給ひし云云

壽永戰爭歳西巡遂不歸　藤彊
法幡黄櫨色留着舊龍衣

當山ハ洛東第一の風景ハ〳〵鳳城九陌の大路小路北ハ加茂二葉山大宮森より南ハ鳩の峯淀の川瀬をゆきゝハ舟ハ唯眼中烏精の客やうを〳〵甚勝致まうを〳〵たり〳〵櫻花の名所東山何ともハあるやうを就中糸櫻數株二月の半ばより綻び初く花下遊客の群をなしし事たぐひなし〳〵

長楽寺ハ〳〵故ハ長〳〵いとなみ作りし

後拾遺

山たかみ春の来るとみわたせば一むらの雲ぞ立ちまさる　大江嘉言

山亜花梢花亜山相躊石陛不嫌艱
試看紫陌金城景盡出香雲艷雪間　西餅居士

長樂寺之碑　同寺ハあり岡崎庁門撰久川玄圃書なり銘曰東山勝景大悲霊境遠俗神州通覗鷲嶺花穠雪香竹苞月冷片石維貞勤銘傳永　明和戊子三月辛卯　藤原玄芝篆

頼山陽之墓　山上の墓地ハ石面ハ頼山陽先生の墓やうの〳〵彫〳〵他の一ケ字もなり〳〵翁名ハ裴字ハ子成通称久太郎山易外史やうを号ハ〳〵後ハ三十六峯やうを号ハ〳〵藝州の藩儒頼春水の男なり翁年十三春水江戸ハ〳〵詩を作り寄ハ紫栗山ハ〳〵見〳〵大ハ歎賞ハ年十八叔父杏坪ハ〳〵後東游尾藤氏の塾ハ在り〳〵一年才學日ハ進ひ〳〵菅茶山の請ハ因り〳〵其塾督なる一年既ハ多病を以て住へを免れ京師ハ游ひ遂ハ止まる時ハ年三十二歳

文化十二年春水翁疾ひ篤を聞く政時徒を聚め莊子を講せり奏を投く直ち発し昼夜往く至れり翁既に終身復び莊子を講せんと文政元年父翁の祥忌を修し後九州に至り弘く海墨に習ひ水西莊や秋月庭中梅花竹樹を羅植にまし鴨河に六年三本木に家を賃てこれを水西莊や秋月庭中梅花竹樹を羅植にまし鴨河に臨み東山に對し草堂を置く山茶水明處や称に天保元年庚寅胸痛を患ひ久し愈ゆ仝三年六月咳嗽を発し咯血に医の云是積年神を労するの所治なり翁此時日本政記を稿もるの中なり病中も尚勉強執筆平常のごとし始病るゝを禁酒不飲もれども客至りて遂を設け談笑自若たり病既に革るに及ぶ我死方に迫る然るに尚眼鏡を著け手政記を刪削し不止ゆゑに左右を顧み問ふ眼鏡を不脱し則逝に九月二十三日なり享年五十三翁為人眼采炯々潮服を著し威あり其国を去に誓ひ曰く我のれ父母の国に仕ふること能はざるに後湾を望み著し貴人に見ゆ京師に出るの後国侯の江戸に往来の時を聞き必ず不應翁文章に勉め史学に精し家蔵書少しもなく古今史籍制度兵法及家譜野乗渉獵せざるなし諸藩多く聘に応じ皆固辞し名声時に鳴る世の文人を風靡し翁画像の自賛あり左に挙

躬偃仰一室而心関百代之失得弗恤己盥薔而憂人家国
文章満腹不濟乎饑曲尺直尋則所不為噫是何物迂拙男
兒乎雖然烏知無念此迂拙者之時哉

春琴居士碑

池の傍に浦上氏姓は紀名は選春琴や号は字は伯華十千瞰菴や号は備前の人玉堂の子なり山水花鳥を克く頗る風致あり書をも能せり名声時に高し弘化三年五月二日歿し年六十八碑銘は浪花篠弼に撰ぶる所なり居士は頼氏や方外の友なり故に碑を爰に立てゝ交友の深きを表ぜんとす尚池辺ふへまさ長澤芦雪登々幕等の碑あり皆門人の立る所なり

早稲田大学図書館
011688995908